東京都北区

田端不動坂遺跡

－田端 1-20-9 地点　（仮称）芥川龍之介記念館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2021

東京都北区
株式会社 東京航業研究所

東京都北区

田端不動坂遺跡

－田端 1-20-9 地点　（仮称）芥川龍之介記念館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－

2021

東京都北区
株式会社 東京航業研究所

例　言

1. 本書は、東京都北区田端 1-20-9 に所在する田端不動坂遺跡田端 1-20-9 地点の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、（仮称）芥川龍之介記念館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。
3. 本調査は、東京都北区の委託を受けて、北区教育委員会（担当：中島広顕、牛山英昭）の指導のもと、株式会社東京航業研究所（調査担当：遠竹陽一郎）が実施した。
4. 発掘調査から報告書作成までの費用は、東京都北区地域振興部が負担した。
5. 発掘調査は、令和元（2019）年 12 月 3 日から令和 2（2020）年 2 月 6 日まで行い、整理作業・報告書作成は、令和 2（2020）年 2 月 7 日から実施し、本書の刊行をもって終了した。
6. 本書の編集は、遠竹陽一郎が行い、執筆は、Ⅰ-1 を北区教育委員会、Ⅰ-2・Ⅱ-1・Ⅲを遠竹陽一郎が行った。
7. 本調査に関わる出土遺物・記録類は、北区教育委員会で保管している。

凡　例

1. 本書で使用した地図は、国土地理院の「基盤地図情報　縮尺レベル 2500」および「基盤地図情報数値標高モデル（5m メッシュ）」、株式会社ミッドマップ東京の「東京都 2500 デジタル白地図」をもとに作成した。
2. 標高の基準面は、東京湾平均海面（T.P.）、平面座標は世界測地系第Ⅸ系である。
3. 図面の縮尺は個別に示した。
4. 図面において、実線は計測に基づくもの、短破線は推定・復元によるもの、一点鎖線は床面の硬化範囲、二点鎖線は攪乱を示す。その他、スクリーントーンは個別に示した。
5. 土層説明において、色調は新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所）を用いて記録・表記した。しまり・粘性は、原則として、弱い・やや弱い・やや強い・強い・非常に強いの 5 段階とした。内容物の量は、原則として、微量・少量・中量・多量・極多量の 5 段階とした。
6. 遺物観察表中の「（　）」は推定値、「〈　〉」は残存値、「－」は測定不能を表す。色調は新版標準土色帖（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所）を用いて記録・表記した。
7. 写真図版の遺物の縮尺は実測図と一致する。

目　次

例言、凡例
目次
挿図目次、表目次、写真図版目次

Ⅰ　はじめに
1. 調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
2. 遺跡の立地と環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ　調査成果
1. 調査の経過と概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2. 奈良・平安時代の遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
1）竪穴住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
2）掘立柱建物跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9
3. その他の遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
1）溝状遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
2）硬化面 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
3）土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
4）ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

Ⅲ　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・51

参考文献

附編　近代の遺物　―芥川家の田端時代―・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・55

報告書抄録

挿図目次

第 1 図　北区の地形と遺跡・・・・・・・・・ 2
第 2 図　田端不動坂遺跡調査地点位置図・・ 3
第 3 図　全体図・・・・・・・・・・・・・ 6
第 4 図　SI1 平・断面図・・・・・・・・・・10
第 5 図　SI1 掘方平面図、SI1-P1 断面図 ・11
第 6 図　SI1 竈 平・断面図・・・・・・・・・12
第 7 図　SI1 遺物出土状況図 ・・・・・・・13
第 8 図　SI2 平・断面図 ・・・・・・・・・・14
第 9 図　SI2 掘方平面図、
　　SI2-P1・P2 断面図 ・・・・・・・15
第 10 図　SI2 竈 平・断面図・・・・・・・・・16
第 11 図　SI2 遺物出土状況図 ・・・・・・・17
第 12 図　SI3 平・断面図・・・・・・・・・・18
第 13 図　SH3 竈 平・断面図、
　　SI3-P1 断面図 ・・・・・・・・・・19
第 14 図　SI3 遺物出土状況図 ・・・・・・・20
第 15 図　SI4 平・断面図（1）・・・・・・21
第 16 図　SI4 平・断面図（2）・・・・・・22
第 17 図　SI4 竈平・断面図 ・・・・・・・・23
第 18 図　SI4 竈土層説明、
　　SI4-P1 ～ 3 断面図 ・・・・・・・24
第 19 図　SI4 遺物出土状況図 ・・・・・・・25
第 20 図　SB1 平面図・・・・・・・・・・・26
第 21 図　SB1-P1 ～ 3 断面図 ・・・・・・・27
第 22 図　SB1-P4 ～ 6 断面図 ・・・・・・・28
第 23 図　SI1 出土遺物実測図 ・・・・・・・33
第 24 図　SI2 出土遺物実測図 ・・・・・・・34
第 25 図　SI3 出土遺物実測図 ・・・・・・・35
第 26 図　SB1 出土遺物実測図・・・・・・・35
第 27 図　SI4 出土遺物実測図 ・・・・・・・27
第 28 図　SD1 平・断面図・・・・・・・・・45
第 29 図　SD2 平・断面図、SX1 平面図・・・46
第 30 図　SK1 ～ 7 平・断面図・・・・・・・47
第 31 図　P1 ～ 5 平・断面図 ・・・・・・・48
第 32 図　第 30 地点周辺遺構配置図 ・・・・51

表目次

表 1　田端不動坂遺跡調査地点一覧表・・・・ 4
表 2　SB1 掘方一覧 ・・・・・・・・・・・・ 9
表 3　遺物観察表（1）・・・・・・・・・・40
表 4　遺物観察表（2）・・・・・・・・・・41
表 5　遺物観察表（3）・・・・・・・・・・42
表 6　SI1 出土貝計量表 ・・・・・・・・・・42
表 7　土坑属性表 ・・・・・・・・・・・・・44
表 8　ピット属性表 ・・・・・・・・・・・・44

写真図版目次

図版 1　調査区全景 ・・・・・・・・・・・ 7
図版 2　SI1・・・・・・・・・・・・・・・・29
図版 3　SI2・3 ・・・・・・・・・・・・・・30
図版 4　SI3・4 ・・・・・・・・・・・・・・31
図版 5　SI4、SB1 ・・・・・・・・・・・・・32
図版 6　SI1・SI2 出土遺物 ・・・・・・・・42
図版 7　SI3・SI4・SB1 出土遺物、墨書 ・・38
図版 8　SI1 出土貝・・・・・・・・・・・・39
図版 9　SD1・2、SK1 ～ 4 ・・・・・・・・・49
図版 10　SK5 ～ 7、P1 ～ 5 ・・・・・・・50

Ⅰ　はじめに

1. 調査に至る経緯

平成 30 年 8 月 21 日、北区地域振興部地域振興課より北区教育委員会教育振興部飛鳥山博物館に対して、北区田端 1 丁目 20 番 9 号における埋蔵文化財試掘調査の実施について協力の依頼があった。対象地は、大正 3 年から昭和 2 年に亡くなるまでの間、芥川龍之介が居住した旧居跡地の一部であり、北区ではここに「（仮称）芥川龍之介記念館」を開設することを計画していた。しかし、対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地である田端不動坂遺跡にも該当しており、近隣での調査結果から計画地にも何らかの遺構が残されている可能性が高いことについて、地域振興課に対して従前より説明を行っていた。そこで、計画が具体的に進むのに先行して、まずは埋蔵文化財試掘調査を実施することとしたのである。

平成 30 年 9 月 19・20 日、北区教育委員会は計画地において埋蔵文化財試掘調査を実施した。調査面積は、49.3 ㎡である。結果として、奈良～平安時代のものとみられる竪穴住居跡、掘立柱建物跡の柱穴とみられるものを含む土坑、溝跡等の遺構が検出された。この結果を受けて、教育委員会は地域振興課に対して、今後計画を進めるにあたり、埋蔵文化財の保存に影響があると認められる場合には、事前に本発掘調査を実施する必要があることを回答した。

令和元年 9 月 24 日、地域振興課より北区長名で文化財保護法第 94 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知が提出された。これに対し東京都教育委員会は、令和元年 10 月 11 日付「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」（31 教地管埋第 2450 号）により、工事着手前に発掘調査を行う必要があることを通知した。

発掘調査を実施するにあたり、入札によって調査主体者に決まった株式会社東京航業研究所より、令和元年 11 月 12 日に文化財保護法第 92 条第 1 項の規定に基づく埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。これに対し東京都教育委員会は「埋蔵文化財の発掘調査について」（31 教地管埋第 2450 号の 2）通知し、令和元年 12 月 3 日より本発掘調査が開始された。

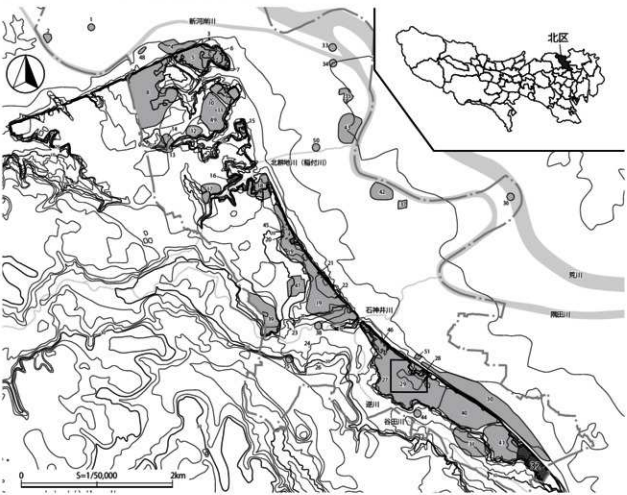
2. 遺跡の立地と環境（第 1・2 図）

北区の地形は、北西から南東にのびる標高差 15 ～ 20m の段丘崖線を境に、北東側の低地と南西側の台地の二つの地形面から成り立っている。北東側の低地は、東京低地と呼ばれる、標高 1 ～ 6m 程度の荒川と旧入間川の沖積低地である。南西側の台地は、武蔵野台地と呼ばれる多摩川により形成された巨大な扇状地である。武蔵野台地の表面は、多数の段丘地形から成り、関東ローム層の堆積時期の違いから、多摩面、下末吉面、武蔵野面、立川面等に区分される。青梅市付近の標高約 180m を最高点に、東へ向かい徐々に低くなり、北区域では標高約 20 ～ 25m である。北区の台地は、武蔵野台地の北東部縁辺の本郷台にあたる。本郷台は、中央を東流する石神井川により南北に分断され、北側は赤羽台・十条台、南側はさらに北西から南西へ流れる谷田川により分断され、西側は本郷台、東側は上野台と呼称される。上野台は、北西の飛鳥山から道灌山を経て、南東の上野の山へと至る、長さ約 5km、幅約 0.5km の細長い小台地である。北東を東京低地を見下ろす急峻な崖線、南西を谷田川に画される。田端不動坂遺跡の周辺は、田端から道灌山、日暮里にかけて、著しく幅を減じ、台地上の平坦面の幅は 150m にも満たない。

田端不動坂遺跡は、北区の遺跡の中では最も南東に位置する。上野台に立地する遺跡は、北西側から、飛鳥山遺跡（縄文時代前期前半の集落、弥生時代中期の環濠集落、古墳時代後期の古墳群）、七社神社前遺跡（縄文時代前期の環状集落）、七社神社裏遺跡（縄文時代中期の地点貝塚、中・後期の集落）、御殿前遺跡（豊島郡衙跡、弥生時代の方形周溝墓）、西ヶ原貝塚（縄文時代中～晩期の馬蹄形貝塚）、および、

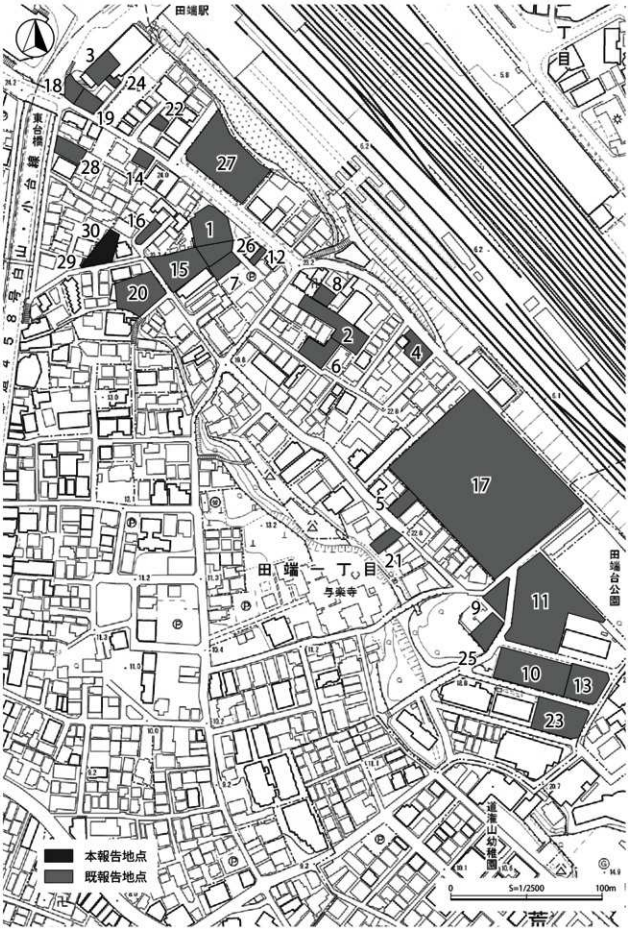
台地上の平坦面一面に広がる、弥生時代後期～古墳時代初頭の大集落などから構成される西ヶ原遺跡群、中里峡上遺跡（郡寺の推定地）、田端西台通遺跡（縄文時代前期前半の集落、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落・方形周溝墓、古墳時代後期の古墳群、古墳時代後期～平安時代の集落）、台地南側の緩斜面には田端町遺跡 (古墳時代後期～平安時代の集落、土師器焼成遺構、粘土採掘坑）がある。田端不動坂遺跡の南東には、弥生時代中期の環濠集落である荒川区道灌山遺跡が隣接する。北側の崖下には国指定史跡である中里貝塚（縄文時代中期中頃～後期初頭）を含む中里遺跡が存在する。

田端不動坂遺跡ではこれまでの調査により、縄文時代早期末の竪穴住居跡 1 軒、縄文時代前期の竪穴住居跡 4 軒、弥生時代中期の竪穴住居跡 1 軒、弥生時代後期から古墳時代前期前半の竪穴住居跡 105 軒、古墳時代前期後半から中期の竪穴住居跡 11 軒、古墳時代後期から奈良・平安時代の竪穴住居跡 55 軒、弥生時代の掘立柱建物跡 1 棟、奈良・平安時代の掘立柱建物跡 9 棟、弥生時代中期の方形周溝墓 2 基を検出し、第 17 地点の古墳時代前期後半の土坑から、東京都指定有形文化財である珠文鏡 1 面や多数の玉類などが出土した。また、第 4・17 地点から道路跡や、第 20・21 地点から道路に伴うと考えられる溝跡が確認されており、遺構の構築時期は中世と捉えられている。



1 浮間遺跡
2 扶桑勤熱内遺跡
3 堂山横穴墓
4 袋低地遺跡
5 赤羽台遺跡
6 赤羽台古墳群
7 赤羽台横穴墓群
8 桐ケ丘遺跡
9 赤羽上ノ台遺跡
10 ミタマ古墳
11 天王塚古墳
12 大六天遺跡
13 島下遺跡
14 大塚古墳
15 稲付城跡
16 稲付公園遺跡
17 梅ノ木遺跡
18 清水坂遺跡
19 十条台遺跡群
20 富士塚古墳
21 十条台小学校横穴墓
22 王子稲荷裏古墳
23（単独出土地）
24 四本木稲荷古墳
25 滝野川八幡社裏貝塚
26 滝野川古墳
27 西ケ原遺跡群
28 甲青塚古墳
29 武蔵国豊島郡衙跡
30 中里遺跡
31 田端町遺跡
32 田端不動坂遺跡
33 熊野神社北方遺跡
34 熊野神社遺跡
35 志茂遺跡
36 都民ゴルフ場遺跡
37 豊島清光館跡
38 滝野川城跡
39 下十条遺跡
40 中里峡上遺跡
41 田端西台通遺跡
42 豊島馬場遺跡
43 宮堀北遺跡
44 東谷戸遺跡
45 十条台古墳群
46 飛鳥山古墳群
47 十条久保遺跡
48 袋西浦遺跡
49 道合遺跡
50 神谷遺跡
51 栄町貝塚

第 1 図　北区の地形と遺跡



第２図　田端不動坂遺跡調査地点位置図

地点	所在地	報告書	発行年	縄文	弥生～古墳前	古墳後～平安	備考
1	田端 1-20-28	田端不動坂遺跡	1985		住居跡 6（弥生.未）	住居 8（奈良 2、平安 6）、掘立柱建物 6（奈良 2、平安 4）、土坑 1（平安）	溝 1、ピット、掘立柱建物の数は建物列を含む。2×3間・2×3 間以上の無柱。
2	田端 1-23-9	田端町遺跡・田端不動坂遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅱ	1994		住居 9（弥生後 5、弥生中 2、弥生後～古墳前 2）	住居 2（古墳.未）	住居 2、ピット、古墳.未の焼失住居よりパン状固化物出土。
3	田端 1-21-5	田端町遺跡・田端不動坂遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅱ	1994		住居 3（弥生後）	住居 1（奈良）	ピット
4	田端 1-24-15	田端町遺跡・田端不動坂遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅱ	1994		住居 5（弥生後）		道路 1、ピット
5	田端 1-27-7	田端町遺跡・田端不動坂遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅱ	1994			住居 1（古墳.未）	住居 1、ピット
6	田端 1-23-5	田端町遺跡・田端不動坂遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅱ	1994		住居 2（弥生後）		溝 2、ピット
7	田端 1-20-30	田端西台遺跡Ⅱ・田端不動坂遺跡Ⅱ	1995		住居 5（弥生後 3・古墳前 2）	住居 5（奈良 2、平安 3）、掘立柱柱穴 1	住居 1
8	田端 1-23-11	田端西台遺跡Ⅱ・田端不動坂遺跡Ⅱ	1995		住居 1（弥生後）		道路 1
9	田端 1-30-15	田端西台遺跡Ⅱ・田端不動坂遺跡Ⅱ	1995	住居（前期）	住居 3（弥生後 1、弥生後～古墳前 1、古墳中 1）	住居 3（平安）	柵列 2、土坑 4、溝 1
10	田端 1-28-5	田端西台遺跡Ⅱ・田端不動坂遺跡Ⅱ	1995		住居 1（古墳中）		大型壁玉出土
11	田端 1-28-1 ～ 2	中里峡上遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅳ・田端不動坂遺跡Ⅳ・田端町遺跡Ⅲ	2000	住居 2（前期）	住居 4（弥生後～古墳前）、方形周溝墓 2（弥生後）	住居 7（平安）、柵列 1	ピット群、住居 6、溝 6、土坑 5、掘立 1、鍛冶遺構
12	田端 1-20-30	中里峡上遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅳ・田端不動坂遺跡Ⅳ・田端町遺跡Ⅲ	2000		住居 1（弥生後～古墳前）		溝 1、土坑 2、ピット
13	田端 1-28-6	中里峡上遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅳ・田端不動坂遺跡Ⅳ・田端町遺跡Ⅲ	2000	住居 2（早 1、前 1）	住居 3（弥生中 1、弥生後～古墳前 2）	住居 2（平安）	住居 1、溝 3、不明遺構、土坑 11、ピット
14	田端 1-20-23	中里峡上遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅳ・田端不動坂遺跡Ⅳ・田端町遺跡Ⅲ	2000	土坑 1	住居 3（弥生後～古墳前）		溝 1、土坑 1
15	田端 1-20-5	中里峡上遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅳ・田端不動坂遺跡Ⅳ・田端町遺跡Ⅲ	2000		住居 1（弥生後）	住居 2（平安）、掘立柱柱穴 1	溝 2、土坑 3、ピット
16	田端 1-20-6	中里峡上遺跡Ⅱ・田端西台遺跡Ⅳ・田端不動坂遺跡Ⅳ・田端町遺跡Ⅲ	2000		住居 1（弥生後）		土坑 6、ピット
17	田端 1-27	田端不動坂遺跡Ⅴ	2003	土坑 1、ピット 4	住居 45（弥生後～古墳初 42、古墳後半 3）、掘立 1、土坑 2、ピット 4、不明遺構 2	住居 18、掘立 1、土坑 3、ピット 3	住居 1、掘立 6、道路 2、土坑 22、竪穴式土坑 7、柵列 2、溝 5、炉穴 3、ピット 17、第 8 号土坑（古墳前後半）より鍛 1、土師 141 点、第 48 号住居（弥生後）より鍛鐵出土。
18	田端 1-21-5	区内遺跡発掘調査報告	2005		住居 1（弥生後期後半～末）	住居 1（奈良）	ピット 2
19	田端 1-21-4	区内遺跡発掘調査報告	2005		住居 3（弥生後期後半）	住居 1（奈良）	ピット 8
20	田端 1-19-19	田端不動坂遺跡－田端一丁目 19 番 19 号地点－	2006		住居 1（弥生後）		溝 3（中世）、硬化面 2
21	田端 1-25-24	田端不動坂遺跡－田端一丁目 19 番 19 号地点－	2006				溝 4（中世 3、近世 1）、段切 1、礎石 8、土坑 1、ピット 4
22	田端 1-21	北区埋蔵文化財調査年報－平成 22 年度－	2012	土坑 1	住居 2（弥生後 1、古墳前 1）		
23	田端 1-29-9	北区埋蔵文化財調査年報－平成 22 年度－	2012	ピット 2		住居 2（平安）	溝 2、ピット 3
24	田端 1-21-4	北区埋蔵文化財調査年報－平成 23 年度－	2013		住居 1（弥生後）		ピット 1
25	田端 1-30-17	北区埋蔵文化財調査年報－平成 25 年度－	2015		住居 2（弥生後後半）	土坑（古墳後）	溝 1（近世以降）
26	田端 1-20-30	北区埋蔵文化財調査年報－平成 25 年度－	2015		住居 4（弥生後後半 2・弥生 1、弥生末～古墳前 1）	住居 3（奈良 2、平安 1）、掘立柱建物（平安）、土坑 1（奈良・平安）	溝 1（近世以降）、ピット 13
27	田端 1-22	東京都北区　田端不動坂遺跡－田端一丁目 22 番地点（仮称）田端聖華保育園新築工事に伴う埋蔵文化財調査－	2015		住居 4（弥生後後半～末 1、弥生末～古墳前 1、弥生後～古墳前 2）		溝 1・ピット 1
28	田端 1-20-18	北区埋蔵文化財調査年報－平成 26 年度－	2016		住居 1（弥生後）	住居 1（古墳後）	
29	田端 1-20-9	北区埋蔵文化財調査年報－平成 26 年度－	2016				溝 1（中世）
30	**田端 1-20-9**	**本報告**	**2021**			**住居 4（奈良 2、平安 2）**	**中世以降の溝 2、硬化面 1、土坑 7、ピット 5**

表 1　田端不動坂遺跡調査地点一覧表

Ⅱ　調査成果

1. 調査の経過と概要

調査期間は令和元（2019）年12月3日～令和2（2020）年2月6日、調査面積は230.2㎡である。廃土処理の関係から、調査区を3区画に分割した。12月3日に発掘資機材と重機を搬入し、①区とした北側の調査区から表土掘削を開始した。①区で検出した遺構はSD1とSB1である。12月11・12日に重機を用いて、①区の埋め戻しと敷地中央の②区の表土掘削を実施した。②区で検出した遺構は、SI1・2、SD1、SX1、SK1～6、P1～5である。1月8・9日に②区の埋め戻しと③区の表土掘削を実施した。③区で検出した遺構は、SI3・4、SD1・2、SX1、SK7である。2月4～6日に埋め戻し・現状復旧を行い、発掘資機材・重機を搬出し調査を終了した。

遺構確認面は、現況地表面から約0.7m下のローム漸移層である。

遺構は、竪穴住居跡4軒（奈良時代2軒、平安時代2軒）、平安時代の掘立柱建物跡1棟、中世以降とみられる溝跡2条、硬化面1箇所、土坑7基、ピット5基を検出した。遺物は、土師器（坏、鉢、甕）、須恵器（蓋、坏、甕）、須恵系土師質土器（坏、皿）、鉄製品（刀子、鉄鏃）が出土した。SI1では覆土中に貝（マガキ・ハマグリ主体）の堆積が確認された。

2. 奈良・平安時代の遺構と遺物

1）竪穴住居跡

【SI1】

遺構（第4～7図　図版2）

重複関係：SK1～3、P1・2に切られる。**平面形**：横長の長方形を呈する。**規模**：主軸長2.91 m、主軸直交長3.58 m、確認面から床面までの深さ0.48 mを測る。**主軸方位**：N-30°-E。**覆土**：灰黄褐色土、黒褐色土を主体に11層に分層される。中央床面上と竈の南東側の床面付近に焼土の分布がみられた。また、南東壁の中央付近から住居跡中央部にかけて貝層が確認された。**床**：貼床。灰黄褐色土・にぶい黄褐色土を主体に構築される。P1から竈前の部分が硬化する。竈の西側に、床面から約0.03mの堤状の高まりがみられた。貯蔵穴の周堤かとも思われたが、貯蔵穴は確認されなかった。**竈**：北壁の中央やや西寄りに位置する。長さ1.24 m、幅1.11 mを測る。東側の袖が残存し、幅0.40m、壁からの張り出しが0.36mである。煙道部は、平面形が緩いV字形を呈し、壁からの掘り込みは0.87mである。燃焼部の幅は0.54m、火床面の高さは深い箇所で床面より約0.15m低い。**柱穴**：検出されなかった。**梯子穴**：P1が梯子穴と推測される。平面形は楕円形を呈し、長径0.39m、短径0.27m、床面から底までの深さは0.07 mを測る。**周溝**：幅0.11～0.29 m、床面からの深さ0.01～0.03 mの周溝がほぼ全周する。

遺物（第23図　図版6　表3）

出土状況：縄文土器、弥生土器（壺、甕）、須恵器（蓋、坏、甕、壺類）、土師器（坏、八、甕）、鉄製品（刀子、鉈、不明品）が出土している。**土器**：1～3は須恵器である。1は蓋で、大きさから椀に伴うものと考えられる2は坏、3は甕である。4～9は土師器で、4～6は落合型の坏、7は鉢、8・9は武蔵型甕のプロトタイプとみられる。**鉄製品**：10・11は刀子、12は鉈、13は不明品である。11は研ぎ減りが著しく、おそらく、本来の身幅の半分程度になっていると思われる。**貝**：貝層から50×50×5㎝の単位でコラムサンプルを採取した（貝1～9）。分類の結果、確認できた貝種はハマグリ（2,469.9g）、マガキ（2,145.3g）、シオフキ（43.6g）、ウネナシトマヤガイ、イワフジツボである（内訳は表6参照。）。また、陸産のヒメコハクガイ（165個）、ヒメベッコウマイマイ（32個）、マルシ

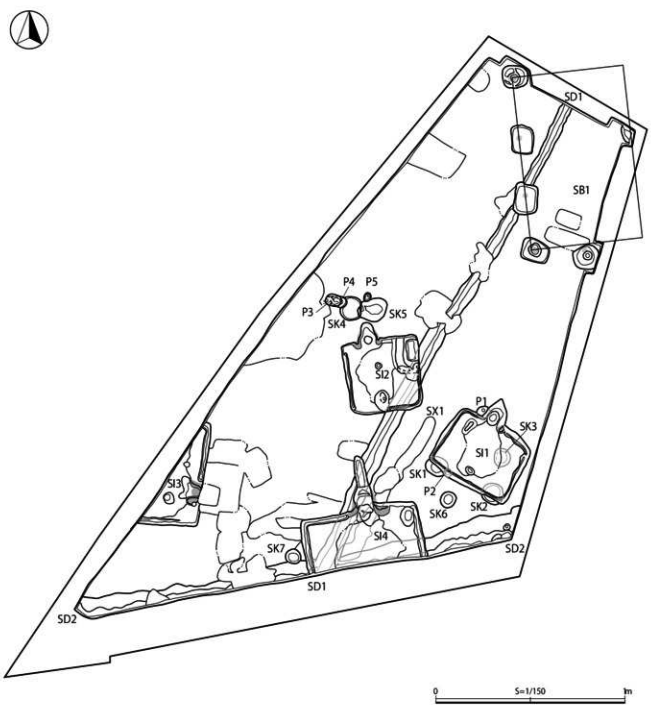
タラガイ（38 個）、ホソオカチョウジガイ（33 個）、ホソオカチョウジガイの幼貝（26 個）も確認された。

時期　奈良時代（8 世紀後半）と推測される。

【SI2】

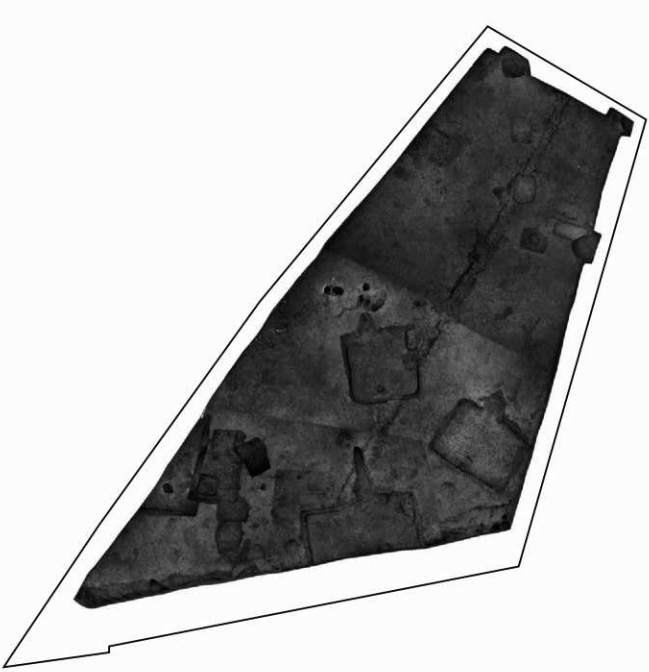
遺構（第 8 ～ 11 図　図版 2）

重複関係：SD1 に切られる。**平面形**：方形を呈する。**規模**：主軸長 2.96 m、主軸直交長 3.04 m、確認面から床面までの深さ 0.38 mを測る。**主軸方位**：N-7°-W。**覆土**：黒褐色土、灰黄褐色土を主体に 10 層に分層される。**床**：貼床。灰黄褐色土を主体に構築される。梯子穴から竈前の部分に硬化がみられ



第 3 図　全体図

る。掘方は中央部を掘り残し、周辺部を掘り下げる形態である。**竈**：北壁の中央やや西寄りに位置する。長さ 0.98 m、幅 1.19 mを測る。東西の袖が残存し、東側の袖は、幅0.23m、壁からの張り出しが0.26m、西側の袖は、幅 0.33m、壁からの張り出しは 0.29m である。煙道部は、平面形が U 字形を呈し、壁からの掘り込みは 0.69m である。燃焼部の幅は 0.61m、火床面の高さは床面とほぼ同じで、わずかに中央がくぼむ。**柱穴**：柱穴は確認できなかったが、中央やや北西寄りの位置の床面が、僅かに窪み、硬化が著しい箇所が観察された。掘り込みを伴わない、柱の受けのような構造の可能性が想定される。**梯子穴**：P1 が梯子穴と推測される。平面形は楕円形を呈し、長径0.41m、短径（推定）0.24m、床面からの深さ 0.28m を図る。周囲が床面よりやや低く、硬化が緩い。南側へ傾斜する柱痕跡が確認された。**貯蔵穴**：P2 が貯蔵穴と考えられ、北東隅で検出された。平面形は長方形に近く、長さ 0.89m、幅 0.52m、床面からの深



図版 1　調査区全景

さ 0.16m を測る。幅約 0.6m、床面からの高さ約 0.03m の周堤を伴う。**周溝**：幅 0.1 ～ 0.2 m、床面からの深さ 0.04 ～ 0.13 m の周溝が西壁と南壁東側から東壁南側にかけて検出された。

遺物（第 24 図　図版 6　表 3・4）

出土状況：縄文土器、弥生土器（壷、甕）、須恵器（坏、甕、瓶）、土師器（甕、台付甕）、須恵系土師質土器（坏、皿）、石製品（編石）、鉄製品（刀子）が出土している。**土器**：14・15 は須恵器の坏、16 は瓶の胴下半とみられる。15 は、底部外面に「十」字形の線刻が施される。17 ～ 19 は土師器の武蔵型甕である。20 ～ 25 は須恵系土師質土器で、20 ～ 23 は坏、24・25 は皿である・20 の底部外面には、「廾」字形の墨書があり、廾を示すものと推測される。**石製品**：26 は、角が摩滅している箇所がみられることから、編石と推測される。**鉄製品**：27・28 は刀子である。

時期　平安時代（9 世紀後半～ 10 世紀初頭）と推測される。

【SI3】

遺構（第 12 ～ 14 図　図版 3・4）

重複関係：単独。**平面形**：方形を呈すると推測される。**規模**：主軸長 4.35 m、主軸直交検出長 2.37 m、確認面から床面までの深さ 0.48 m を測る。**主軸方位**：N-8°-E。**覆土**：灰黄褐色土を主体に 8 層に分層される。**床**：貼床。灰黄褐色土を主体に構築される。東壁沿いを除き硬化がみられる。**竈**：東壁の南寄りに位置する。煙道部を攪乱により消失する。残存長 0.56 m、幅 1.00 m を測る。南北の袖が残存し、北側の袖は、幅 0.24m、壁からの張り出しが 0.56m、南側の袖は、幅 0.35m、壁からの張り出しは 0.55m である。燃焼部の幅は 0.36m、火床面は床面よりやや低く、比高差は 0.07m である。**柱穴**：P1 が主柱穴と推測される。平面形は不整な楕円形を呈し、規模は長径 0.47m、短径 0.41m、床面からの深さ 0.63m を測る。柱痕跡が確認された。堆積状況から柱を据えてから床を構築した状況が想定される。**周溝**：幅 0.18 ～ 0.29 m、床面からの深さ 0.02 ～ 0.10 m の周溝が東壁と南壁で検出された。南東角は、床面をうまく捉えられずに掘りすぎた。この箇所にも周溝が巡っていたものと思われる。**備考**：防空壕や戦災処理のごみ穴などの攪乱を受ける。

遺物（第 25 図　図版 7　表 4）

出土状況：須恵器（蓋、坏）、土師器（坏、甕、甑）、鉄製品（鉄鏃）が出土している。**土器**：29 は須恵器の蓋である。30 ～ 34 は土師器で、30・31 は坏、32・33 は武蔵型甕、34 は甑である。**鉄製品**：35 は長頸鏃とみられる。

時期　奈良時代（8 世紀後半）と推測される。

【SI4】

遺構（第 15 ～ 19 図　図版 4・5）

重複関係：SD1・2、SX1 に切られる。**平面形**：方形を呈すると推測される。**規模**：主軸検出長 2.50 m、主軸直交長 4.80 m、確認面から床面までの深さ 0.52 m を測る。**主軸方位**：N-12°-W。**覆土**：灰黄褐色土を主体に 10 層に分層される。**床**：貼床。灰黄褐色土を主体に構築される。竈前の部分から中央部にかけてに硬化がみられる。掘方は中央部を掘り残し、周辺部を掘り下げる形態である。**竈**：北壁の中央やや東寄りに位置する。長さ 2.52 m、幅 1.72 m を測る。東西に袖が残存し、東側の袖は、幅 0.64m、壁からの張り出しが 0.69m、西側の袖は、幅 0.47m、壁からの張り出しは 0.36m である。煙道部は、平面形が細長い U 字形を呈し、壁からの掘り込みは 1.96m である。また、煙道部の奥壁は、火床面から緩く階段状に上がったのち、傾斜が外側へ向かって緩やかに下がり、最後に急激に立ち上がる。燃焼部の幅は 0.62m、火床面は床面よりやや低く、比高差は最大で 0.18m である。**柱穴**：3 基検出された（P2 ～ 4）。検出したのは、掘方調査の時点である。P2 は、平面形が楕円形を呈し、規模は長径 0.49m、短径 0.42m、

床面からの深さ 0.43m を測る。柱痕跡が確認された。竈の東側の袖の構築土が、P2 の覆土の上に堆積する。P3は、平面形が楕円形を呈し、規模は長径0.46、短径0.37m、床面からの深さ0.52mを測る。P4 は、南側の調査区壁にかかり、半分程度が検出されたと思われる。平面形は円形を呈し、規模は直径 0.24m、床面からの深さ 0.30m を測る。貼床構築土により上部を塞がれている。**貯蔵穴**：P1 が貯蔵穴と考えられ、北東隅で検出された。平面形は楕円形を呈し、長径 0.78m、短径 0.54m、床面からの深さ 0.11m を測る。**周溝**：幅 0.22 ～ 0.32 m、床面からの深さ 0.05 ～ 0.10 mの周溝が竈と貯蔵穴（P1）の間を除く壁に沿って検出された。

遺物（第 27 図　図版 7　表 4・5）

出土状況：弥生土器（壷・甕）、須恵器（蓋、坏、高台付坏、甕、壺類）、土師器（坏、甕）、須恵系土師質土器（坏、高台付椀、高台付皿）、石製品（砥石）、鉄製品（鉄鏃）が出土している。**土器**：36 ～ 41 は須恵器で、36 ～ 40 は坏、41 は瓶の底部とみられる。42 ～ 45 は土師器で、42 は南武蔵型の坏、43 ～ 45 は武蔵型甕である。46 ～ 48 は須恵系土師質土器、46 は坏、47 は高台付椀、48 は高台付皿である。47 は、内面に丁寧なミガキと黒色処理が、外面には、「上」と思われる墨書が施される。48 は、内面に丁寧なミガキが、底部外面には「七」の墨書が施される。**石製品**：49 は砥石の小片である。**鉄製品**：50 は鉄鏃の茎部とみられるが、釘の可能性もある。

時期　平安時代（9 世紀後半）と推測される。

2）掘立柱建物跡

【SB1】

遺構（第 20 ～ 22 図　図版 5）

重複関係：SD1 に切られる。**平面形**：桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟の側柱建物と推測される。**規模**：桁行長 6.88m、梁行長（推定）4.43m。柱間は桁行が北から 2.42m、2.29m、2.16m、梁行が 2.08m である。**主軸方位**：N-6°-W。**掘方**：表 2 に属性値を示す。角の掘方（P1・4）の掘り込みが深く、また柱痕跡の径が太いといった特徴が指摘できる。

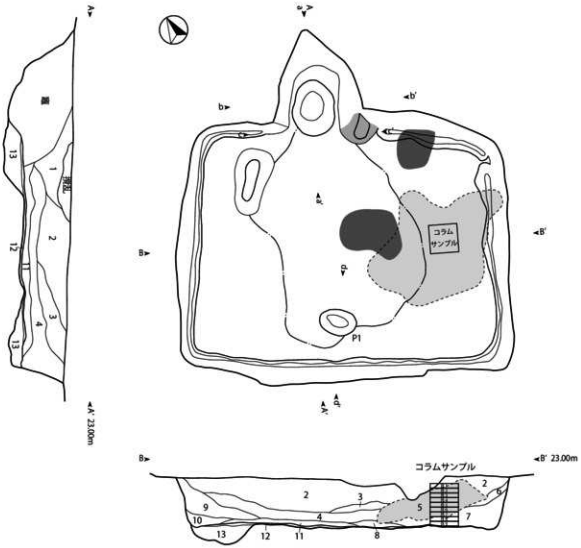
遺物（第 26 図　図版 7　表 5）

出土状況：弥生土器（壷、甕）、須恵器（坏、甕、壺類）、土師器（壷、甕）、須恵系土師質土器（坏）、瓦が出土している。**土器**：51 は須恵系土師質土器の坏である。内面に丁寧なミガキと黒色処理が施される。

時期　平安時代（9 世紀）と推測される。

遺構番号	平面形	長軸（長径）	短軸（短径）	確認面からの深さ	主軸方位	覆土	備考
P1	隅丸長方形	1.00m	0.91m	0.67m	N-86°-E	柱痕跡（1 層）と灰黄褐色土、褐灰色土、にぶい黄橙色土による理土	柱痕跡の径 0.34m
P2	隅丸長方形	1.14m	0.91m	0.52m	N-1°-E	柱痕跡（1 層）と灰黄褐色土、褐灰色土、にぶい黄橙色土、黒褐色土による理土	柱痕跡の径 0.23m
P3	隅丸長方形	1.28m	0.95m	0.52m	N-2°-E	柱痕跡（1 層）と灰黄褐色土、褐灰色土、黒褐色土による理土	柱痕跡の径 0.21m
P4	隅丸長方形	1.12m	0.88m	0.87m	N-73°-W	柱痕跡（1 層）と褐灰色土による理土	柱痕跡の径 0.43 × 0.27m
P5	楕円形	1.03m	0.98m	0.68m	N-75°-E	柱痕跡（1 層）と灰黄褐色土、黒褐色土による理土	柱痕跡の径 0.23m
P6	隅丸長方形か	<0.72m>	<0.38m>	0.55m	N-17°-W	灰黄褐色土、黒褐色土、にぶい黄褐色土による理土	

表 2　SB1 掘方一覧



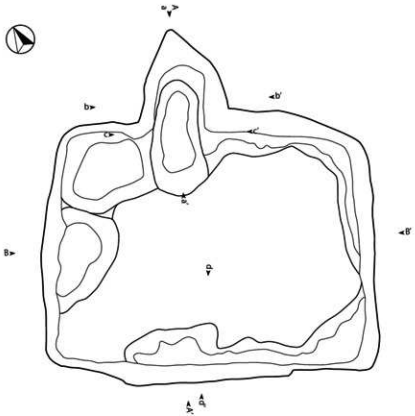
SI1　土層説明

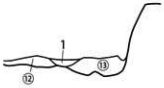
番号	色調	締り	粘性	混入物
1	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	やや強い	白色粘土（～φ3 ㎜）を少量、焼土（～φ2 ㎜）を少量、ローム（～φ2 ㎜）を少量含む。
2	黒褐色（10YR3/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ3 ㎜）を少量含む。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ5 ㎜）を中量含む。
4	黒褐色（10YR3/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ3 ㎜）を中量含む。
5	黒褐色（10YR3/2）	弱い	弱い	混土貝層、マガキ主体、下部1/3にハマグリ顕著。
6	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや弱い	焼土（～φ10 ㎜）を多量、炭化物（～φ2 ㎜）を少量含む。
7	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや弱い	ローム（～φ5 ㎜）を多量含む。
8	明赤褐色（2.5YR5/6）	やや弱い	やや弱い	焼土（～φ8 ㎜）を多量含む。
9	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ10 ㎜）を中量含む。
10	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	強い	ローム（～φ8 ㎜）を中量含む。
11	黒褐色（10YR3/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ15 ㎜）を中量含む。
12	灰黄褐色（10YR4/2）	非常に強い	やや強い	ローム（～φ20 ㎜）を多量含む。貼床。
13	にぶい黄褐色（10YR4/3）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ50 ㎜）を多量含む。貼床。

貝
粘土
焼土

0　S=1/40　2m

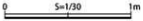
第４図　SI1 平・断面図



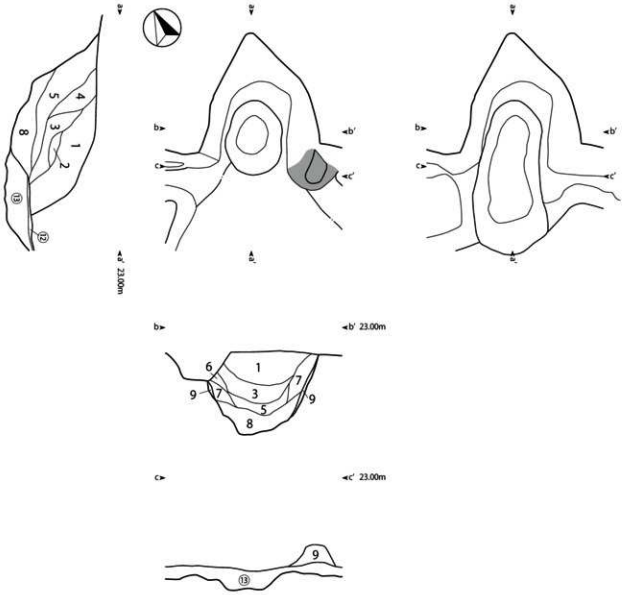


SI1-P1　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ15 mm）を中量含む。
⑫	住居 12 層			
⑬	住居 13 層			



第 5 図　SI1 掘方平面図、SI1-P1 断面図

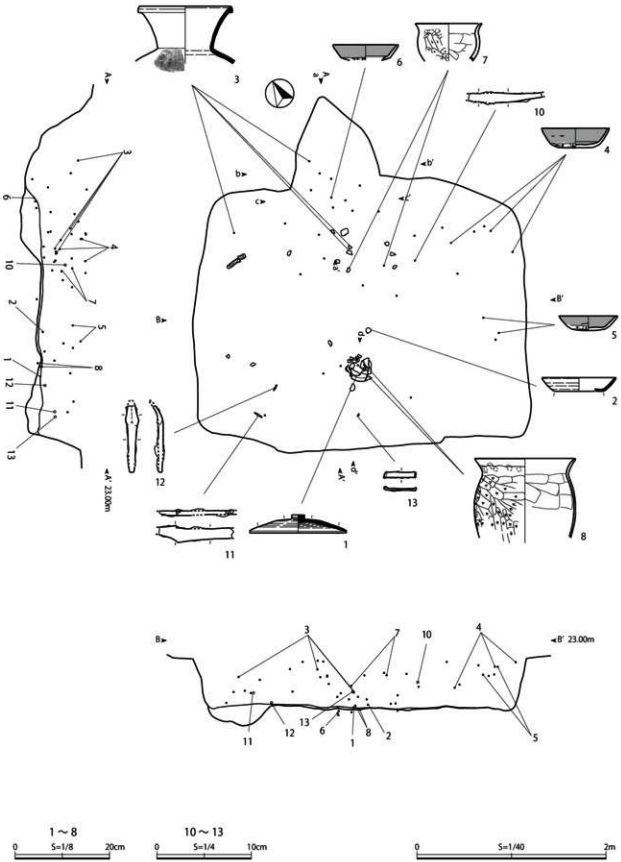


SI1- 竈　土層説明

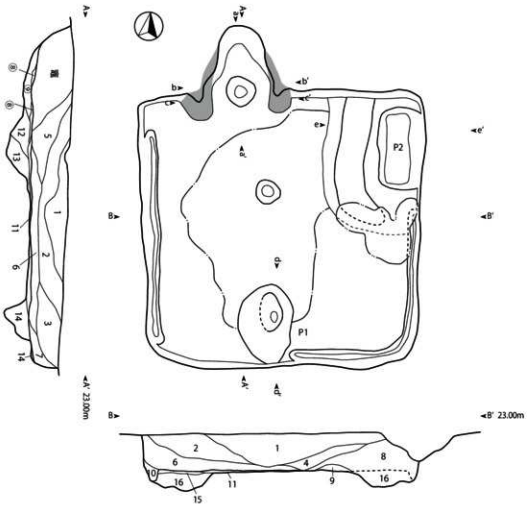
番号	色調	締り	粘性	混入物
1	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ2㎜）を少量、白色粘土（～φ2㎜）を少量含む。
2	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	白色粘土（～φ10㎜）を中量、焼土（～φ2㎜）を中量含む。
3	黒褐色（10YR3/2）	やや強い	やや弱い	ローム（～φ2㎜）を少量、白色粘土（～φ2㎜）を少量含む。
4	黒褐色（10YR3/2）	やや強い	やや弱い	ローム（～φ2㎜）を少量、白色粘土（～φ5㎜）を中量含む。
5	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	白色粘土（～φ30㎜）を中量、焼土（～φ3㎜）を中量含む。
6	にぶい黄褐色（10YR4/3）	やや強い	やや強い	白色粘土（～φ3㎜）を微量含む。
7	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	白色粘土（～φ15㎜）を多量含む。
8	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや強い	焼土（～φ15㎜）を多量、被熱ローム（～φ15㎜）を下部に中量含む。
9	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	白色粘土（～φ5㎜）を多量、ローム（～φ5㎜）を少量含む。袖構築土。
⑫	住居 12 層			
⑬	住居 13 層			

0　S=1/30　1m　　粘土

第 6 図　SI1 竈 平・断面図



第７図　SI1 遺物出土状況図



SI2　土層説明

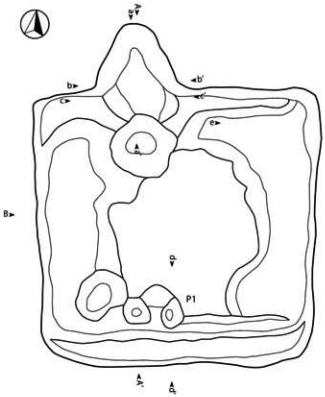
番号	色調	締り	粘性	混入物
1	黒褐色（10YR3/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ3 mm）を少量含む。
2	黒褐色（10YR3/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ20 mm）を少量含む。
3	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ2 mm）を微量含む。
4	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3 mm）を少量含む。
5	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ5 mm）を少量、焼土（～φ5 mm）を少量含む。
6	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3 mm）を微量含む。
7	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ8 mm）を中量含む。
8	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや強い	ローム（～φ15 mm）を中量含む。
9	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ10 mm）を多量含む。
10	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ5 mm）を中量含む。周溝覆土。
11	にぶい黄橙色（10YR6/4）	非常に強い	やや強い	ローム主体。貼床。
12	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや弱い	ローム（～φ10 mm）を多量含む。貼床。
13	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや弱い	ローム（～φ50 mm）を極多量含む。貼床。
14	灰黄褐色（10YR4/2）	強い	やや強い	ローム（～φ30 mm）を多量含む。貼床。
15	黒褐色（10YR3/1）	強い	やや強い	ローム（～φ10 mm）を中量含む。貼床。
16	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ20 mm）を多量含む。貼床。

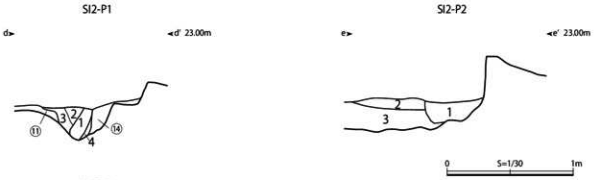
ⓑ　竈８層

ⓐ　竈９層

0　S=1/40　2m　　粘土

第８図　SI2 平・断面図





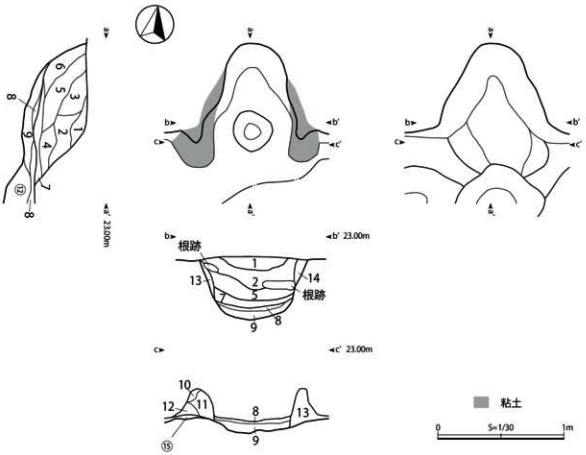
SI2-P1　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ10㎜）を多量含む。柱痕跡。
2	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ5㎜）を少量含む。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ5㎜）を多量含む。
4	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ10㎜）を少量含む。
⑪	住居 11 層			
⑭	住居 14 層			

SI2-P2　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を中量含む。
2	黒褐色（10YR3/1）	強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を中量含む。周堤。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや強い	ローム（～φ50㎜）を多量含む。

第 9 図　SI2 掘方平面図、SI2-P1・P2 断面図

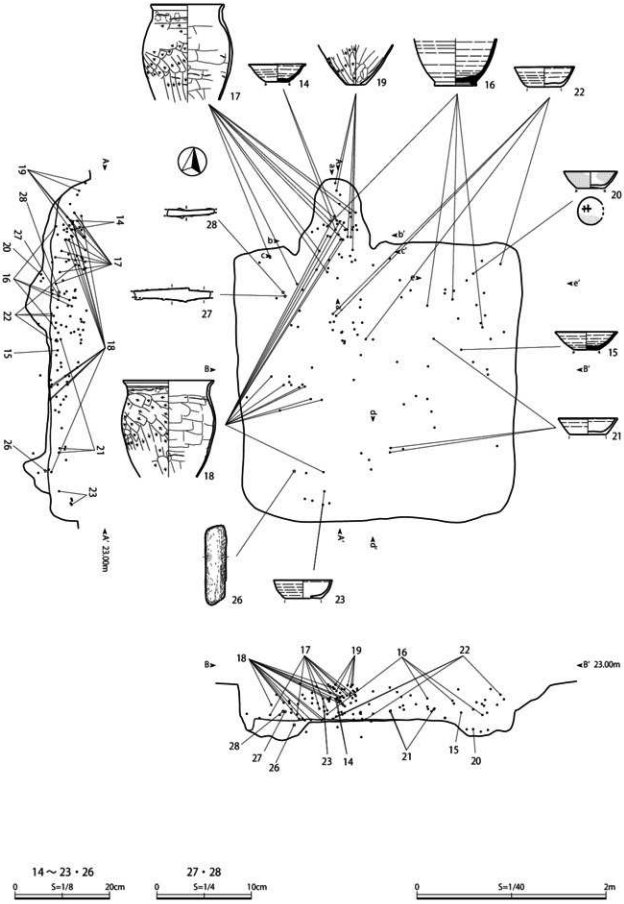


SI2- 竈　土層説明

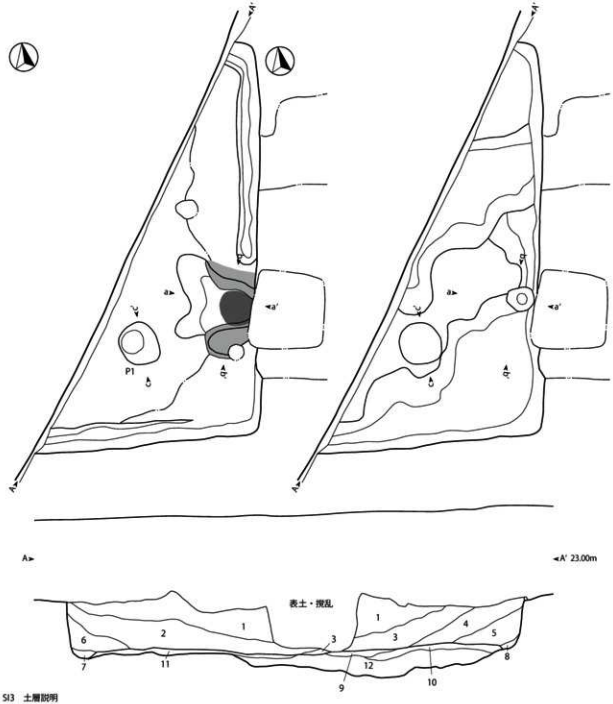
番号	色調	締り	粘性	混入物
1	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	やや弱い	白色粘土（～φ10 ㎜）を少量、焼土（～φ10 ㎜）を少量含む。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや弱い	白色粘土（～φ20 ㎜）を中量、焼土（～φ10 ㎜）を少量含む。やや砂質。
3	にぶい黄褐色（10YR7/3）	やや弱い	やや弱い	白色砂質粘土主体。
4	にぶい黄褐色（10YR5/3）	弱い	やや弱い	焼土（～φ30 ㎜）を極多量、白色粘土（～φ20 ㎜）を中量含む。やや砂質。
5	橙色（2.5YR6/6）	やや弱い	やや弱い	焼土主体。
6	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	焼土（～φ5 ㎜）を多量含む。
7	黒褐色（10YR3/2）	やや弱い	やや強い	焼土（～φ8 ㎜）を少量、白色粘土（～φ5 ㎜）を微量含む。
8	にぶい黄橙色（10YR6/4）	やや強い	やや強い	ローム主体。貼床。
9	黒色（10YR2/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ5 ㎜）を少量含む。貼床。
10	明赤褐色（2.5YR5/6）	弱い	弱い	焼土。袖構築土。
11	灰黄褐色（10YR5/2）	弱い	弱い	ほぼ砂。袖構築土。
12	灰黄褐色（10YR5/2）	弱い	弱い	焼土（～φ2 ㎜）を少量含む。袖構築土。
13	灰黄褐色（10YR5/2）	弱い	やや強い	焼土（～φ10 ㎜）を少量含む。袖構築土。
14	灰白色（10YR8/1）	やや弱い	やや強い	内面赤化。

⑫　住居 12 層
⑮　住居 15 層

第 10 図　SI2 竈 平・断面図



第 11 図　SI2 遺物出土状況図

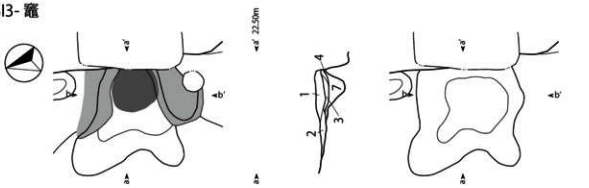


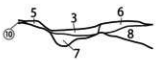
SI3　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を中量含む。
3	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや弱い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
4	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
5	褐灰色（10YR4/1）	弱い	やや弱い	ローム（～φ15㎜）を中量含む。
6	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ10㎜）を中量含む。
7	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや強い	ローム（～φ5㎜）を中量含む。周溝覆土。
8	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや強い	ローム（～φ10㎜）を中量含む。周溝覆土。
9	灰黄褐色（10YR4/2）	非常に強い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を中量含む。貼床。
10	灰黄褐色（10YR4/2）	強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を中量含む。貼床。
11	灰黄褐色（10YR4/2）	強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を中量含む。貼床。
12	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ50㎜）を極多量含む。盛方埋土。

第 12 図　SI3 平・断面図

SI3- 竈



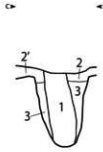


粘土
焼土

0 S=1/30 1m

SI3- 竈　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	にぶい黄橙色（10YR7/3）	やや強い	強い	焼土（～φ10 ㎜）を多量含む。天井崩落土。
2	褐灰色（10YR4/1）	弱い	強い	焼土（～φ5 ㎜）を中量含む。
3	明黄褐色（10YR6/6）	弱い	やや弱い	被熱白色粘土
4	黄灰色（2.5Y5/1）	やや強い	やや強い	焼土（～φ2 ㎜）を少量含む。
5	灰黄褐色（10YR6/2）	強い	やや強い	砂質粘土主体。袖構築土。
6	灰白色（10YR7/1）	強い	強い	砂質粘土主体。袖構築土。
7	明黄褐色（10YR7/6）	強い	やや強い	焼土（～φ10 ㎜）を多量含む。ロームブロック主体。掘方埋土。
8	灰黄褐色（10YR4/2）	強い	やや強い	ローム（～φ3 ㎜）を多量含む。掘方埋土。
⑩	住居 10 層			

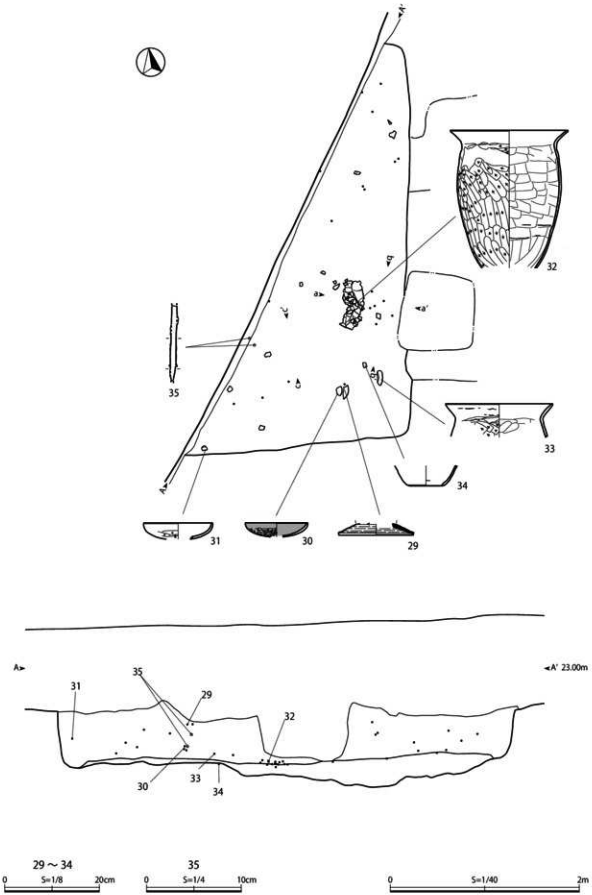


SI3-P1　土層説明

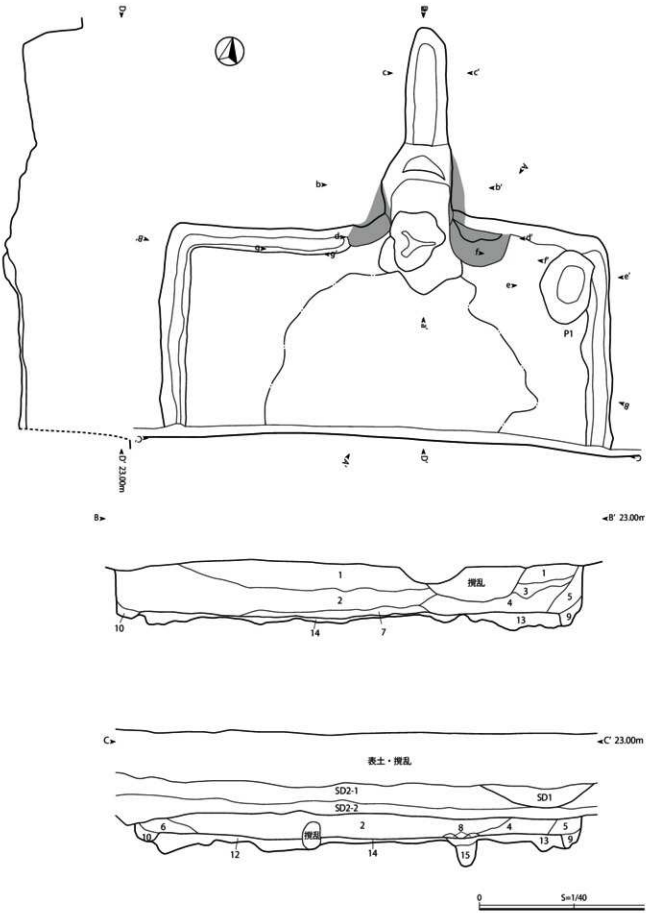
番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	弱い	やや強い	ローム（～φ5 ㎜）を中量含む。柱痕跡。
2	明黄褐色（10YR7/6）	強い	やや強い	ロームブロック主体。貼床。住居 11 層に対応。
2'	灰黄褐色（10YR4/2）	強い	やや強い	ローム（～φ30 ㎜）を多量含む。貼床。住居 11 層に対応。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ20 ㎜）を極多量含む。

0 S=1/30 1m

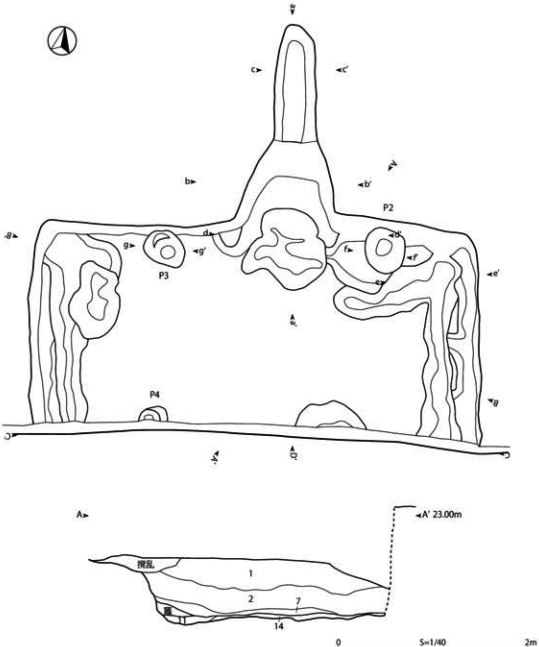
第 13 図　SI3 竈平・断面図、SI3-P1 断面図



第 14 図　SI3 遺物出土状況図



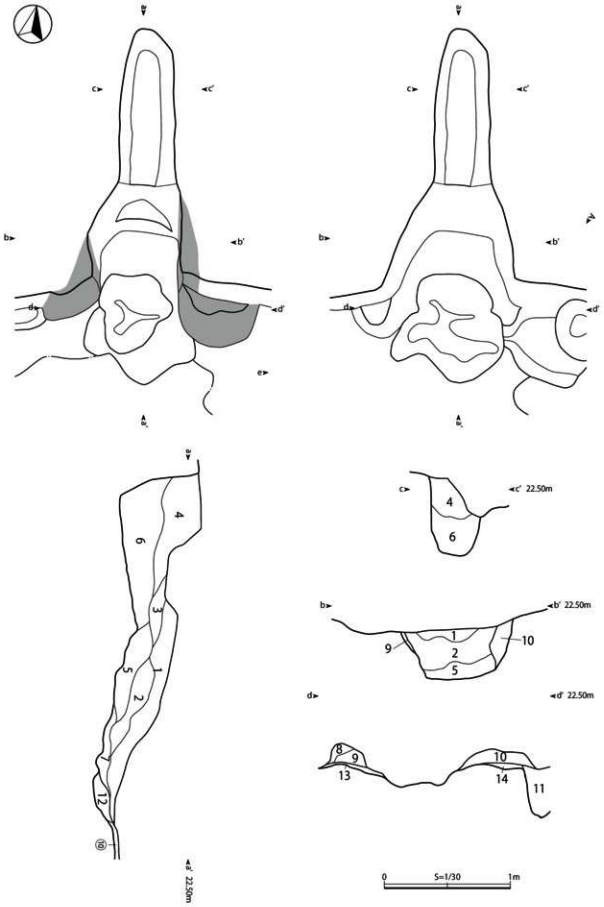
第 15 図　SI4 平・断面図（1）



SI4　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ40㎜）を多量含む。
4	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を中量含む。
5	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
6	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
7	灰黄褐色（10YR4/2）	強い	やや強い	ローム（～φ5㎜）を中量、白色粘土（～φ5㎜）を中量含む。
8	灰黄褐色（10YR6/2）	やや強い	やや強い	白色粘土主体。
9	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ10㎜）を中量含む。周溝覆土。
10	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや弱い	ローム（～φ5㎜）を多量含む。周溝覆土。
11	にぶい黄褐色（10YR4/3）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を中量、白色粘土（～φ20㎜）を中量含む。貼床。
12	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を極多量含む。貼床。
13	灰黄褐色（10YR5/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ30㎜）を極多量含む。貼床。
14	明黄褐色（10YR7/6）	非常に強い	やや弱い	ローム主体。貼床。
15	灰黄褐色（10YR5/2）	弱い	やや弱い	ローム（～φ5㎜）を多量含む。P4覆土。

第16図　SI4 平・断面図（2）

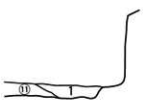


第 17 図　SI4 竈 平・断面図

SI4- 竈　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	白色粘土（～φ20 ㎜）を中量、焼土（～φ20 ㎜）を少量含む。
2	黒褐色（10YR2/2）	やや強い	強い	焼土（～φ10 ㎜）を中量含む。天井崩落土。
3	褐灰色（10YR5/1）	やや弱い	やや強い	白色粘土（～φ30 ㎜）を中量含む。砂質。
4	褐灰色（10YR5/1）	やや強い	やや強い	白色粘土（～φ30 ㎜）を中量含む。
5	灰黄褐色（10YR6/2）	弱い	強い	焼土（～φ30 ㎜）を中量含む。
6	褐灰色（10YR5/1）	やや弱い	弱い	焼土（～φ15 ㎜）を極多量含む。
7	灰黄褐色（10YR5/2）	やや弱い	強い	被熱ローム（～φ20 ㎜）を中量含む。
8	灰黄褐色（10YR6/2）	やや弱い	やや強い	砂質粘土。袖構築土。
9	にぶい黄橙色（10YR7/2）	やや強い	やや強い	砂質粘土。袖構築土。
10	灰黄褐色（10YR6/2）	やや強い	やや強い	白色粘土（～φ15 ㎜）を中量含む。砂質粘土。袖構築土。
11	灰黄褐色（10YR5/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ20 ㎜）を中量含む。P 2 覆土。
12	明黄褐色（10YR7/6）	非常に強い	やや強い	ローム主体。貼床。
13	明黄褐色（10YR7/6）	強い	やや強い	ローム主体。貼床。
14	灰黄褐色（10YR5/2）	強い	やや強い	ローム（～φ30 ㎜）を多量含む。貼床。

⑩　住居 10 層



SI4-P1　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	弱い	やや強い	ローム（～φ5 ㎜）を中量含む。

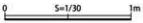
⑪　住居 11 層

SI4-P2　土層説明

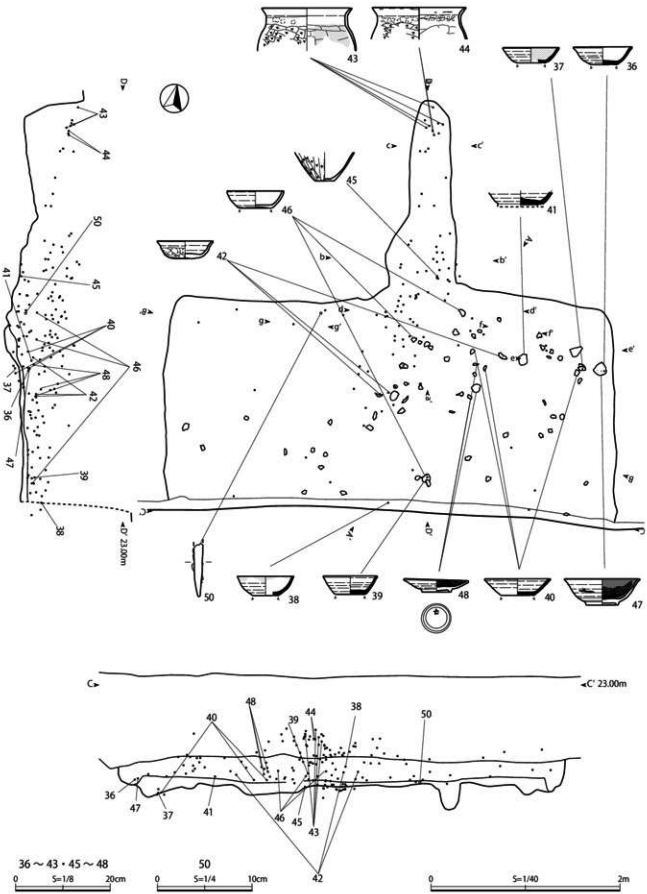
番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ10 ㎜）を少量含む。柱痕跡。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ30 ㎜）を多量含む。

SI4-P3　土層説明

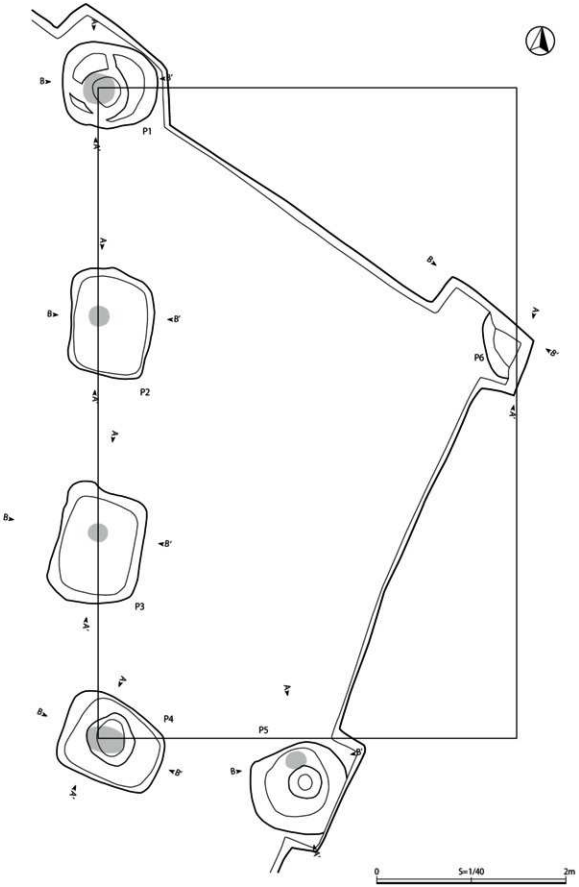
番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ15 ㎜）を中量含む。



第 18 図　SI4 竈土層説明、SI4-P1 ～ 3 断面図

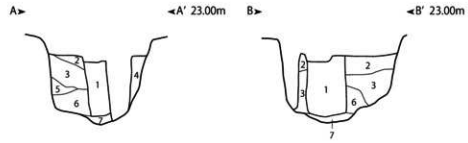


第 19 図　SI4 遺物出土状況図



第 20 図　SB1 平面図

P1



SB1-P1　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ8㎜）を少量含む。柱痕跡。
2	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を少量含む。
3	にぶい黄橙色（10YR6/4）	やや強い	やや強い	ロームブロック（～φ20㎜）主体。
4	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を少量含む。
5	にぶい黄橙色（10YR6/3）	やや強い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
6	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ8㎜）を少量含む。
7	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ8㎜）を中量含む。

P2

SB1-P2　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を微量含む。柱痕跡。
2	にぶい黄橙色（10YR6/4）	やや強い	やや強い	ロームブロック（～φ20㎜）主体。
3	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を少量含む。
4	黒褐色（10YR3/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ8㎜）を少量含む。
5	灰黄褐色（10YR4/2）	強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を多量含む。

P3

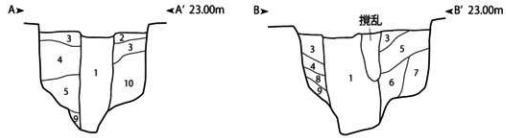
SB1-P3　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を少量含む。柱痕跡。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を多量含む。
3	褐灰色（10YR4/1）	強い	やや強い	ローム（～φ10㎜）を中量含む。
4	黒褐色（10YR3/1）	強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を多量含む。
5	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ30㎜）を少量含む。

0　S=1/30　1m

第 21 図　SB1-P1 ～ 3 断面図

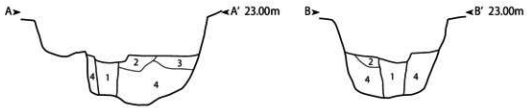
P4



SB1-P4　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ5㎜）を少量含む。柱痕跡。
2	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を中量含む。
3	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
4	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ10㎜）を多量含む。
5	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ30㎜）を多量含む。
6	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を中量含む。
7	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ5㎜）を少量含む。
8	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ2㎜）を微量含む。
9	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ5㎜）を少量含む。
10	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ30㎜）を多量含む。

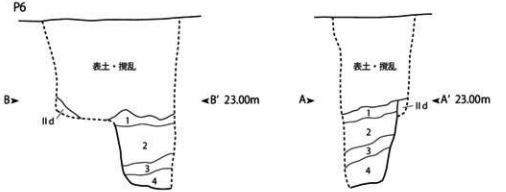
P5



SB1-P5　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を微量含む。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ15㎜）を中量含む。
3	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を少量含む。
4	黒褐色（10YR3/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ30㎜）を多量含む。

P6



SB1-P6　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ10㎜）を少量含む。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を中量含む。
3	黒褐色（10YR3/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ5㎜）を少量含む。
4	にぶい黄褐色（10YR5/4）	やや強い	やや強い	ローム主体。

0　S=1/30　1m

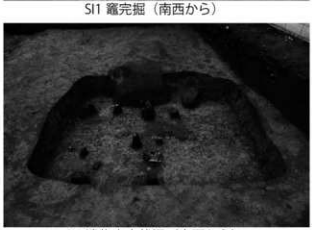
第 22 図　SB1-P4 ～ 6 断面図

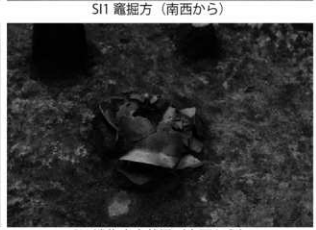
SI1 完掘（南西から）

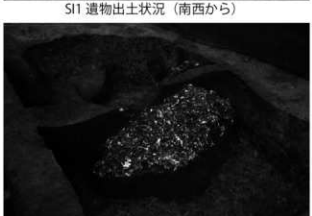
SI1 掘方完掘（南西から）

SI1 竈完掘（南西から）

SI1 竈掘方（南西から）


SI1 遺物出土状況（南西から）

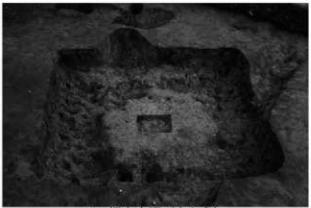

SI1 遺物出土状況（南西から）

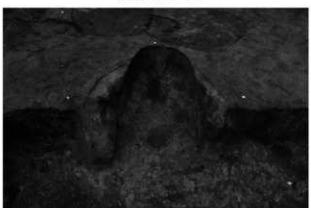

SI1 貝層検出（西から）

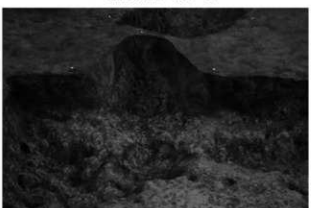
SI1 貝層断面（南西から）

図版 2　SI1

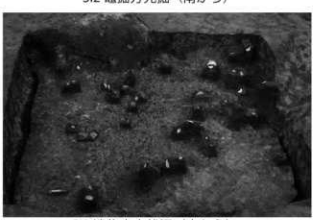
SI2 完掘（南から）


SI2 掘方完掘（南から）


SI2 竈完掘（南から）


SI2 竈掘方完掘（南から）

SI2-P2 完掘（南から）

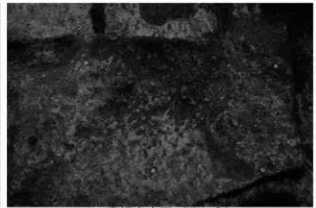

SI2 遺物出土状況（南から）

SI3 完掘（南から）

SI3 掘方完掘（南から）

図版 3　SI2・3

SI3 竈完掘（西から）

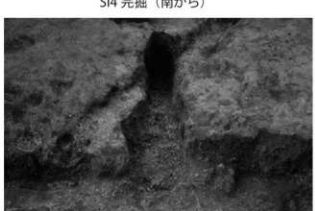

SI3 竈掘方完掘（西から）

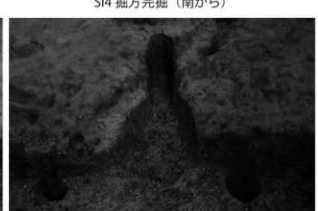
SI3 遺物出土状況（南から）

SI3 遺物出土状況（西から）

SI4 完掘（南から）

SI4 掘方完掘（南から）


SI4 竈完掘（南から）


SI4 竈掘方完掘（南から）

図版4　SI3・4

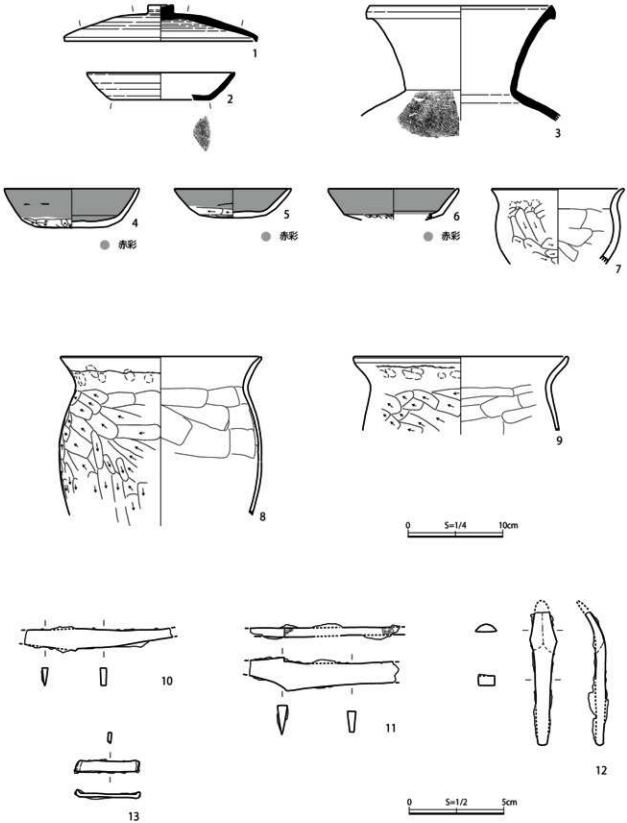
SI4 遺物出土状況（南から）

SI4 遺物出土状況（南から）

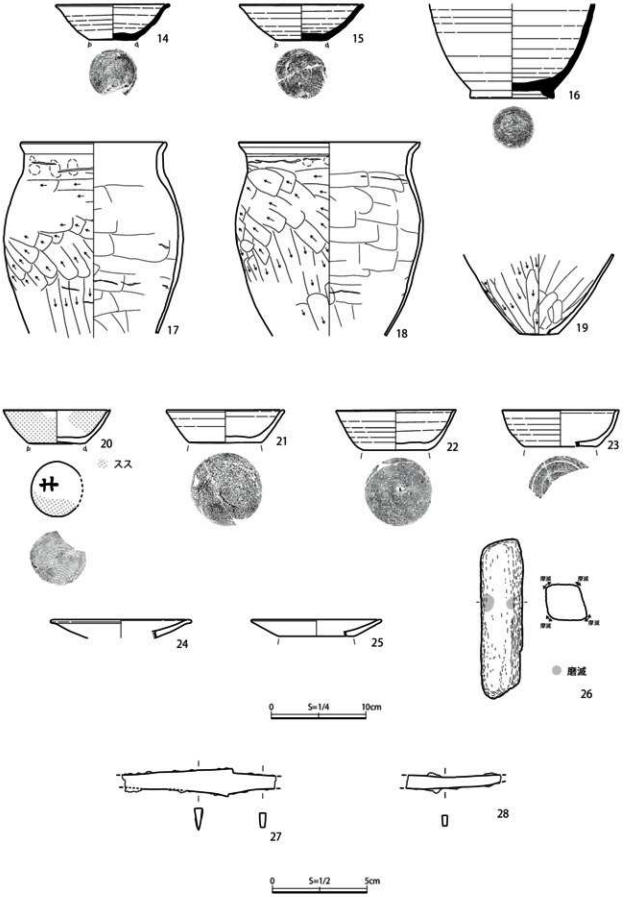
SB1 柱痕跡検出状況（南から）

SB1 完掘（南から）

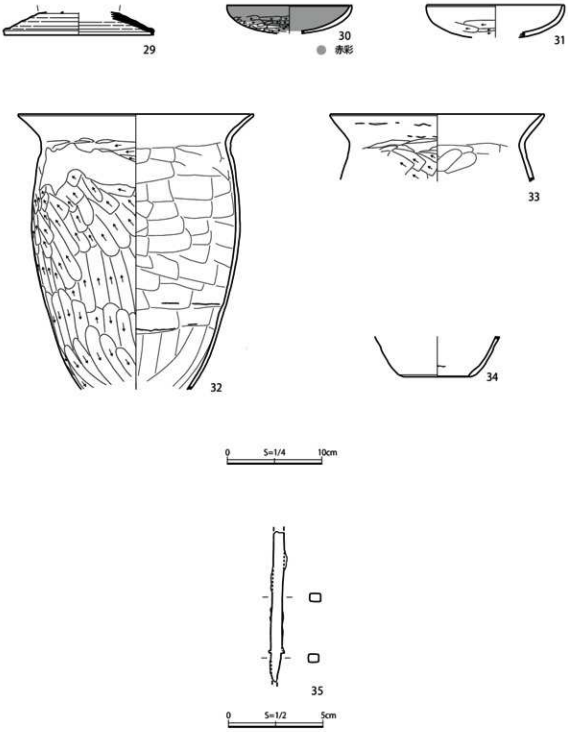
図版 5　SI4、SB1



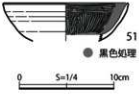
第 23 図　SI1 出土遺物実測図



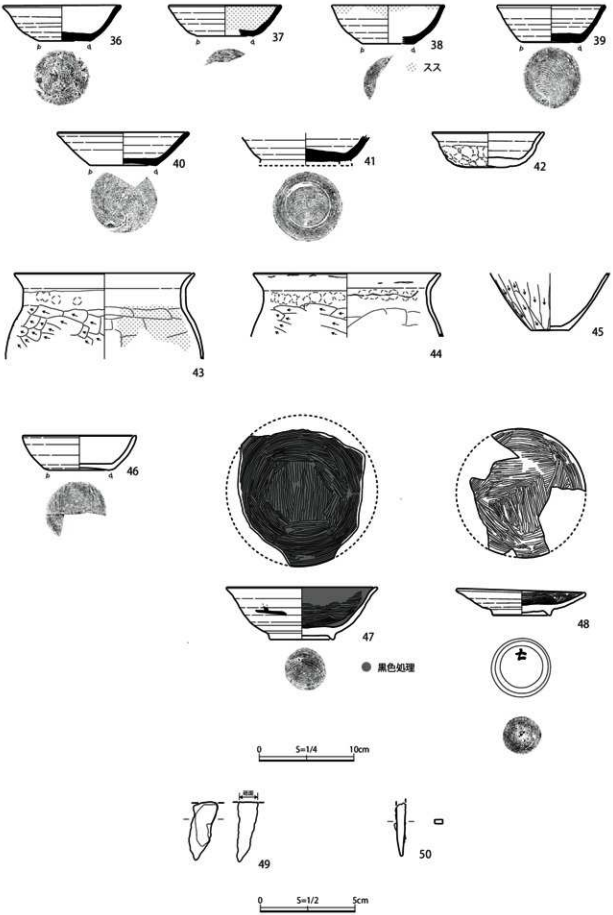
第 24 図　SI2 出土遺物実測図



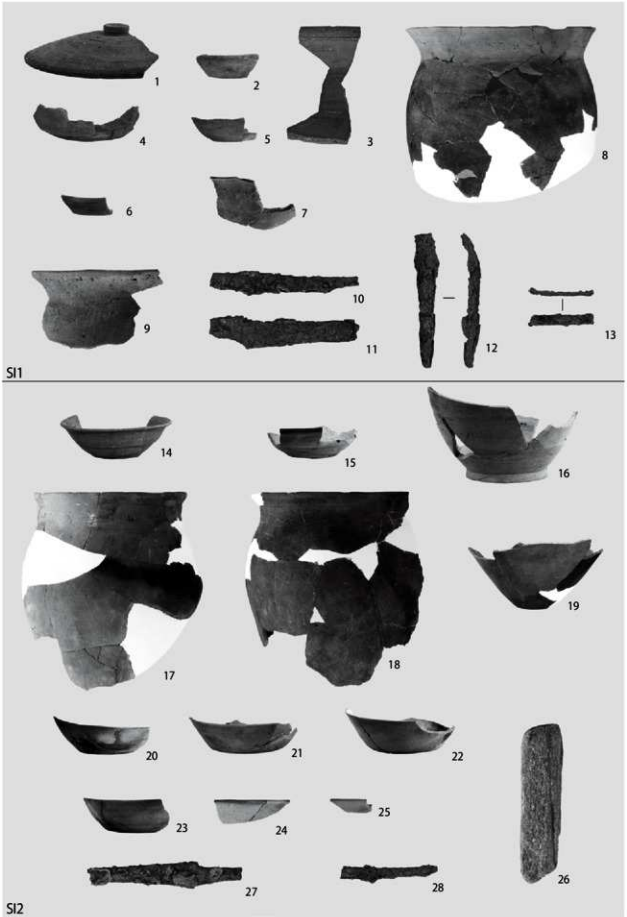
第 25 図　SI3 出土遺物実測図



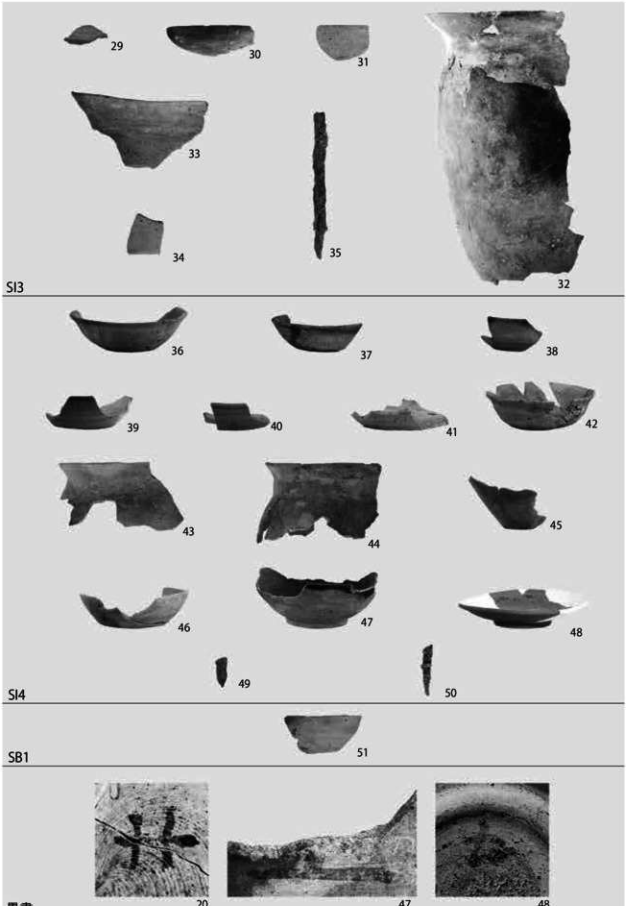
第 26 図　SB1 出土遺物実測図



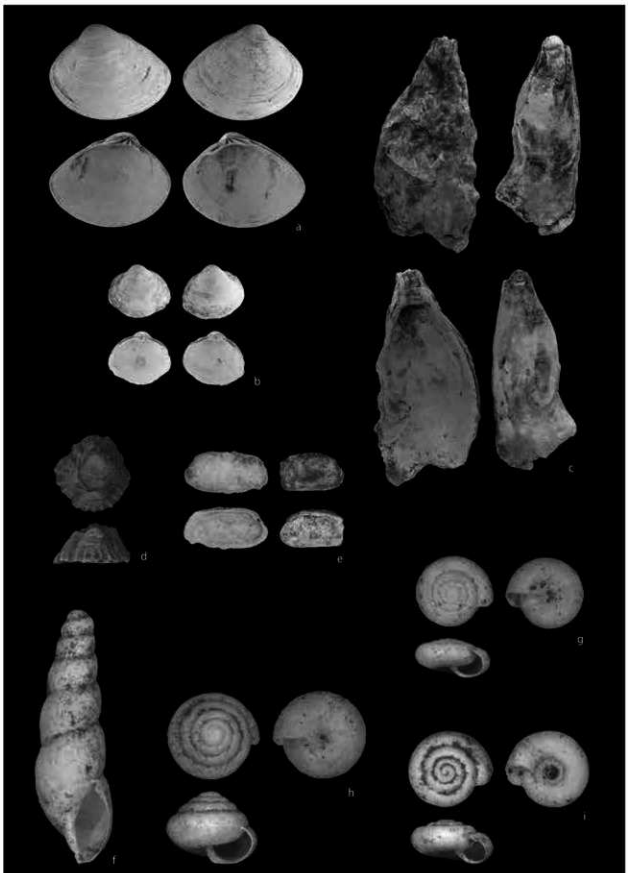
第 27 図　SI4 出土遺物実測図



図版 6　SI1・SI2 出土遺物



図版7　SI3・SI4・SB1 出土遺物、墨書



a：ハマグリ（x0.5）　b：シオフキ（x0.5）　c：マガキ（x0.5）　d：イワフジツボ（x20）　e：ウネナシトマヤガイ（x20）
f：ホソオカチョウジガイ（x200）　g：ヒメベッコウマイマイ（x200）　h：マルシタラガイ（x200）　ヒメコハクガイ（x200）

図版 8　SI1 出土貝

掃図番号 図版番号	種別 器種	出土位置	法量（cm）	遺存状態	色調	胎土	焼成	文様・調整・技法	備考
1	須恵器 蓋	SI1-45	口径：（20.5） 器高：　3.8	つまみ～口縁 1/3	内外面：暗灰色（10YR5/1） 胎土：灰黄褐色（10YR6/2）	密：砂粒中量 白色砂状物質	良	外面：回転ナデ、頂部一部回転ヘラケズリ、 つまみ部回転ナデ。 内面：回転ナデ。	赤比企窯跡産
2	須恵器 坏	SI1-43	口径：（15.6） 器高：　2.9 底径：（10.3）	口縁～底部 1/8	外面：灰黄褐色（10YR6/2） 内面胎土：灰黄色（2.5Y6/2）	密：砂粒少量 白色砂状物質	やや良	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ。	赤比企窯跡産
3	須恵器 鍋	SI1-15・36・37・51	口径：（19.6） 器高：＜12.1＞	口縁～胴部 1/8	外面：暗灰色（7.5YR5/1） 内面胎土：暗灰黄色（2.5Y5/2）	密：砂粒少量 白色砂状物質	良	外面：口縁～胴部回転ナデ、胴部平行タタキ。 内面：口縁～胴部回転ナデ、胴部ナデ。	赤比企窯跡産
4	土師器 坏	SI1-5・7・21・a上	口径：（14.3） 器高：　4.2 底径：（7.5）	口縁部1/10 ～底部1/2	外面：橙色（7.5YR6/6） 赤彩：明褐色（7.5YR5/6） 胎土：にぶい橙色（7.5YR6/4）	密：砂粒少量	良	外面：口縁部回転ナデ・赤彩、体下～底部 ヘラケズリ。 内面：回転ナデ・赤彩。	落合型
5	土師器 坏	SI1-18・23・カイ	口径：（12.4） 器高：　3.1 底径：（7.2）	口縁～底部 1/8	外面胎土：にぶい橙色（7.5YR7/4） 赤彩：橙色（5YR6/6）	密：砂粒少量	やや良	外面：口縁部回転ナデ・赤彩、体下～底部 ヘラケズリ。 内面：回転ナデ・赤彩。	落合型
6	土師器 坏	SI1-54	口径：（13.8） 器高：＜3.3＞	口縁～体部 1/8	外面胎土：にぶい橙色（7.5YR6/4） 赤彩：明赤褐色（2.5YR5/6）	密：少量	やや良	外面：口縁～体部回転ナデ・赤彩、底部へ ラケズリ。 内面：回転ナデ・赤彩。	
7	土師器 鉢	SH-2・35	口径：（14.0） 器高：＜8.0＞	口縁～胴部 1/16	内外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 胎土：にぶい橙色（5YR6/4）	密：砂粒少量	やや良	外面：口縁部横ナデ・指押え、胴部ヘラケ ズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	
8	土師器 鍋	SI1-44・66・b上・b下・d上	口径：　21.3 器高：＜17.0＞	口縁～胴部 全周	内外面：橙色（5YR6/6）	密：砂粒中量	良	外面：口縁部横ナデ・指押え、胴部ヘラケ ズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	武蔵型プロトタイプ
9	土師器 鍋	SI1-表	口径：（22.7） 器高：＜7.8＞	口縁～胴部 1/4	外面胎土：明赤褐色（2.5YR5/8） 内面：橙色（5YR6/6）	密：砂粒中量	良	外面：口縁部横ナデ・指押え、胴部ヘラケ ズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	武蔵型プロトタイプ
10	鉄製品 刀子	SI1-17	全長：　＜7.9＞ 刀身部長：＜2.8＞ 刀身部幅：1.2 刀身部厚：0.3 茎部長：＜5.1＞ 茎部幅：0.9 茎部厚：0.3 重さ：　6.9g	刀身部～茎部				刃関を有す。	
11	鉄製品 刀子	SI1-27	全長：　＜6.9＞ 刀身部長：＜1.8＞ 刀身部幅：1.8 刀身部厚：0.5 茎部長：＜5.1＞ 茎部幅：1.1 茎部厚：0.4 重さ：　13.5g	刀身部～茎部				棟関を有す。茎が減りが著しい。棟線の茎 部に木質が残着する。	
12	鉄製品 鞭	SI1-28	全長：＜7.9＞ 刃部長：＜1.5＞ 刃部幅：1.4 刃部厚：0.4 茎部長：5.5 茎部幅：0.9 茎部厚：0.5 重さ：　11.4g	刃部の先端が 欠損する。					
13	鉄製品 不明	SI1-30	長：　3.4 幅：　0.5 厚：　0.15 重さ：　1.0g	完形か？				両端が折れ曲がる。	
14	須恵器 坏	SI2-112・123・K	口径：　12.1 器高：　3.7 底径：　5.1	口縁～体部 3/4	外面：灰色（2.5Y5/1） 内面：灰オリーブ色（5Y6/2） 胎土：灰色（2.5Y6/1）	密：砂粒中量	良	回転ナデ、底部回転糸切り離し後未調整。	
15	須恵器 坏	SI2-69・a・a側・表	口径：（13.1） 器高：　3.8 底径：（5.6）	口縁部1/8 ～底部全周	内外面：橙色（7.5YR7/6）	密：砂粒中量	良	回転ナデ、底部回転糸切り離し後未調整。	墨元不十分 底部線刻「＋」
16	須恵器 鉢	SI2-4・73・77・101・a側・D3-3	器高：＜10.0＞ 底径：（8.9）	胴部1/3～ 底部全周	内外面：灰白色（10YR7/1） 胎土：にぶい黄橙色（10YR7/2）	密：砂粒少量	やや良	外面：回転ナデ、胴下部回転ヘラケズリ、 底部糸切ヘラケズリ、高台部回転ナ デ。 内面：回転ナデ、底部に自然釉付着。	
17	土師器 鍋	SI2-32・84・85・94・103・110・118・130・131・a側・K	口径：（15.5） 器高：＜20.2＞	口縁～胴部 1/3	内外面：にぶい橙色（7.5YR6/4）	密：砂粒少量	やや良	外面：口縁部横ナデ・指押え、胴部ヘラケ ズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	武蔵型
18	土師器 鍋	SI2-49・50・51・52・55・91・93・97・109・111・115・121・122・c・K	口径：（19.2） 器高：＜20.5＞	口縁～胴部 1/2	外面：にぶい赤褐色（2.5YR5/4） 内面胎土：明赤褐色（2.5YR5/6）	密：砂粒中量	良	外面：口縁部横ナデ・指押え、胴部ヘラケ ズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ。	武蔵型
19	土師器 鍋	SI2-29・107・108・126・127・a・K	器高：＜8.5＞ 底径：　（4.2）	胴～底部 全周	外面：にぶい褐色（7.5YR5/3） 内面胎土：にぶい赤褐色（5YR5/4）	密：砂粒中量	良	外面：胴部横ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：ヘラナデ。	武蔵型

表３　遺物観察表（1）

掲載番号 図版番号	種別 器種	出土位置	法量（cm）	遺存状態	色調	胎土	焼成	文様・調整・技法	備考
20	須恵系土師質土器 坏	SZ-135・a層	口径：（11.3） 器高：3.6 底径：（6.1）	口縁～底部 1/3	内外面：橙色（5YR7/8）	密：砂粒少量	良	回転ナデ、体部スス付着、底部回転糸切り離し後未調整。	底部墨書「竹」（二十カ？）
21	須恵系土師質土器 坏	SZ-58・59・68・表	口径：（12.8） 器高：3.5 底径：7.7	口縁～底部 1/4	内外面：にぶい黄橙色（10YR7/4）	密：砂粒少量	良	回転ナデ、底部全面回転ヘラケズリ。	
22	須恵系土師質土器 坏	SZ-35・36・44・80	口径：（12.7） 器高：4.3 底径：（6.9）	口縁～底部 1/3	内外面：橙色（5YR7/6）	密：砂粒少量	良	回転ナデ、底部全面回転ヘラケズリ。	
23	須恵系土師質土器 坏	SZ-8・54・c	口径：（12.3） 器高：3.9 底径：（7.6）	口縁～底部 1/3	外面：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：にぶい褐色（7.5YR6/3） 胎土：橙色（5YR6/6）	密：砂粒少量	良	回転ナデ、底部全面回転ヘラケズリ。	
24	須恵系土師質土器 皿	SZ-a層・d層	口径：（14.9） 器高：<2.0>	口縁～体部 1/4	外面胎土：橙色（5YR7/6） 内面：橙色（5YR6/6）	密：砂粒少量	良	回転ナデ。	
25	須恵系土師質土器 鉢	SZ-a	口径：（13.8） 器高：1.8 底径：（8.0）	口縁～底部 1/8	内外面：橙色（5YR7/6）	密：砂粒少量	良	回転ナデ、底部回転ヘラケズリ？	
26	石製品 編石	SZ-53	長さ：16.9 幅：4.3 厚さ：3.8	完存		石材：片岩		摩滅４箇所。	
27	鉄製品 刀子	SZ-30	全長：<8.1> 刀身部長：<5.8> 刀身部幅：1.3 刀身部厚：0.4 茎部長：<2.3> 茎部幅：0.7 茎部厚：0.3 重さ：9.1g	刀身部～茎部				棟間・刃間を有す。	
28	鉄製品 刀子	SZ-31	全長：<5.1> 茎部幅：0.7 茎部厚：0.3 重さ：2.8g	茎部					
29	須恵器 甕	SZ3-4	口径：（15.8） 器高：<2.4>	口縁～頸部 1/16	内外面：黄灰色（2.5Y6/1）	密：砂粒中量 白色鉄物質	良	外面：回転ナデ、頸部回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	南北金堂跡産
30	土師器 坏・盤	SZ3-20・5	口径：（13.2） 器高：<3.0>	口縁～体部 1/3	外面：橙色（5YR6/6） 胎土：にぶい黄橙色（10YR7/3）	密：砂粒少量	やや良	外面：口縁部回転ナデ・赤彩、体～底部ヘラケズリ・赤彩。 内面：口縁部回転ナデ、横～底部ナデ。	
31	土師器 坏	SZ3-22	口径：（14.6） 器高：<3.4>	口縁～体部 1/8	内外面：橙色（5YR6/6）	密：砂粒中量	やや良	外面：口縁部回転ナデ、体部ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	
32	土師器 甕	SZ3-30	口径：（24.9） 器高：<29.1>	口縁～頸部 1/4	内外面：橙色（5YR6/6）	密：砂粒中量	良	外面：口縁部横ナデ、頸部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、頸部ヘラナデ。	武蔵型プロトタイプ
33	土師器 甕	SZ3-17	口径：（22.7） 器高：<7.1>	口縁～頸部 1/4	内外面：明赤褐色（5YR5/6）	密：砂粒中量	良	外面：口縁部横ナデ、頸部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ・うっすらとスス付着、頸部ヘラナデ。	武蔵型
34	土師器 甑	SZ3-18	器高：<4.3> 底径：（7.0）	底部部 1/8	外面：橙色（5YR7/8） 内面：橙色（5YR6/8） 胎土：橙色（2.5YR6/8）	密：砂粒中量	やや良	摩滅の為不明瞭。	
35	鉄製品 鉄鏃	SZ3-14・15	全長：<8.0> 頸部長：<6.4> 頸部幅：0.6 頸部厚：0.4 茎部長：<1.6> 茎部幅：0.5 茎部厚：0.4 重さ：7.3g	頸部～茎部				棟間	長頸鏃
36	須恵器 坏	SZ4-114	口径：12.5 器高：3.6 底径：5.5	口縁～底部 2/3	内外面：にぶい黄橙色（10YR6/3） 胎土：にぶい黄橙色（10YR5/3）	密：砂粒中量 白色鉄物質	やや良	回転ナデ、底部回転糸切り離し後未調整。	南北金堂跡産 遺元不十分
37	須恵器 坏	SZ4-140	口径：（12.0） 器高：3.3 底径：（5.9）	口縁～底部 1/2	外面胎土：灰黄褐色（10YR6/2） 内面：褐灰色（10YR6/1）	密：砂粒中量 白色鉄物質	やや良	外面：回転ナデ、底部回転糸切り離し後未調整。 内面：回転ナデ、スス付着。	南北金堂跡産
38	須恵器 坏	SZ4-164	口径：（11.9） 器高：4.1 底径：（5.4）	口縁～底部 1/8	内外面：灰黄色（2.5Y6/2）	密：砂粒少量 白色鉄物質	やや良	回転ナデ、口縁部スス付着、底部回転糸切り離し後未調整。	南北金堂跡産
39	須恵器 坏	SZ4-83	口径：（11.5） 器高：3.9 底径：（6.3）	口縁 1/16 ～底部全周	外面：にぶい橙色（5YR6/4） 内面胎土：にぶい橙色（7.5YR7/4）	密：砂粒少量	やや良	回転ナデ、底部回転糸切り離し後未調整。	遺元不十分
40	須恵器 坏	SZ4-93・94・139・a下	口径：（14.0） 器高：3.5 底径：（7.0）	口縁部 1/16 ～底部 2/3	外面胎土：灰黄色（2.5Y6/2） 内面：黄灰色（2.5Y6/1）	密：砂粒中量	良	回転ナデ、底部回転糸切り離し後未調整。	

表４　遺物観察表（2）

掘削番号 回転番号	種別 器種	出土位置	法量（cm）	遺存状態	色調	胎土	焼成	文様・調整・技法	備考
41	須恵器 坏	SI4-96	残高：<2.6>	底部全周 高台部欠損	内面：淡黄色（2.5Y8/3）	密：砂粒中量	やや良	外面：回転ナデ、底部回転糸切り離し後外周部回転ヘラケズリ。 内面：回転ナデ	器元不十分
42	土師器 坏	SI4-63・64・95・a上・c下	口径：　11.9 器高：　3.7 底径：　6.0	口縁～底部 3/4	内外面：にぶい橙色（7.5YR7/4）	密：砂粒少量	やや良	外面：口縁部回転ナデ、体部指押え、底部ヘラケズリ。 内面：回転ナデ。	市武蔵型
43	土師器 甕	SI4-150・160・169・171・K	口径：（19.8） 器高：<9.1>	口縁～胴部 1/3	内外面：明赤褐色（5YR5/6）	密：砂粒中量	良	外面：口縁部横ナデ、指押え、胴部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ、胴部ヘラナデ・ススボ有。	武蔵型
44	土師器 甕	SI4-165・167	口径：（19.8） 器高：<6.7>	口縁～胴部 1/4	外面：にぶい褐色（7.5YR5/4） 内面：明赤褐色（5YR5/6） 胎土：にぶい橙色（7.5YR6/4）	密：砂粒中量	良	外面：口縁部横ナデ・指押え、胴部ヘラケズリ。 内面：口縁部横ナデ・指押え、胴部ヘラナデ。	武蔵型
45	土師器 甕	SI4-156	残高：<6.1> 底径：（3.9）	胴～底部 1/2	外面：にぶい赤褐色（5YR5/4） 内面胎土：橙色（5YR6/6）	密：砂粒中量	良	外面：胴部横ヘラケズリ、底部ヘラケズリ。 内面：摩滅・調整の為不明瞭。	武蔵型
46	須恵系土 師器土師 坏	SI4-71・77・82・c下・ST1	口径：　12.0 器高：　3.7 底径：　7.2	口縁～底部 1/3	内外面：橙色（5YR6/6）	密：砂粒中量	良	回転ナデ、底部摩滅のため不明瞭・回転糸切り離し後未調整か？	
47	須恵系土 師器土師 高台付椀	SI4-113	口径：（16.0） 器高：　5.5 底径：（6.8）	口縁部1/8 ～底部全周	外面胎土：にぶい橙色（7.5YR6/4） 内面：黒色（7.5YR2/1）	密：砂粒少量	良	外面：回転ナデ、体下部回転ヘラケズリ。 回転糸切り離し後未調整、高台部回転ナデ。 内面：ミガキ・黒色処理。	外面墨書「上」か？
48	須恵系土 師器土師 高台付椀	SI4-89・90・92・a下	口径：　13.7 器高：　2.7 底径：　6.1	口縁～底部 1/2	内外面：橙色（7.5YR6/6）	密：砂粒少量	良	外面：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、高台部回転ナデ。 内面：ミガキ。	底部墨書「七」
49	石製品 砥石	SI4-a下	長さ：　<3.1> 幅：　<1.5> 厚さ：　<3.4>	小片 残存1面		石材：砂岩			
50	鉄製品 鉄鏃	SI4-14・15	全長：<2.8> 茎部幅：0.4 茎部厚：0.2 重さ：　0.8g	茎部					岩の可能性もある。
51	須恵系土 師器土師 坏	SI1-P4	口径：（13.3） 器高：<4.0>	口縁～体部 1/4	外面胎土：橙色（7.5YR6/6） 内面：黒褐色（7.5YR3/1）	密：砂粒少量	良	外面：回転ナデ。 内面：ミガキ・黒色処理。	

表 5　遺物観察表（3）

掘取 番号	ハマグリ				マガキ				シオフキ				合計	備考・その他の貝
	左殻	右殻	不明	合計	左殻	右殻	不明	合計	左殻	右殻	不明	合計		
H 1	56.3	17.2	18.0	71.5	175.0	38.5	34.8	248.3					319.8	ウネナシトマヤガイ
H 2	15.9	4.8	0.3	21.0	306.0	47.3	81.2	434.5					455.5	ウネナシトマヤガイ
H 3	10.1	10.9	2.9	23.9	247.0	86.1	77.9	413.0	1.5	4.5		6.0	442.9	ウネナシトマヤガイ
H 4	26.3	97.5	22.4	146.2	129.0	72.3	54.0	255.3					401.5	ウネナシトマヤガイ、イワフジツボ
H 5	143.0	188.0	49.3	380.3	211.0	162.0	69.4	442.4		5.8	0.4	6.2	828.9	ウネナシトマヤガイ
H 6	434.0	497.0	111.6	1,042.6	160.0	62.7	65.7	288.4	10	10.1	3.8	23.9	1,354.9	
H 7	219.0	225.0	53.1	497.1	21.4	9.2	15.9	46.1	7.4		0.1	7.5	550.7	
H 8	188.0	86.1	11.4	285.5	12.4		3.4	15.8					301.3	
H 9			1.8	1.8			1.5	1.5					3.3	
合計	1,077.6	1,126.5	270.8	2,469.9	1,261.8	480.1	403.4	2,145.3	18.9	20.4	4.3	43.6	4,658.8	

表 6　SI1 出土貝計量表

2. その他の遺構

1）溝状遺構

【SD1】

遺構（第 28 図）

重複関係：SB1、SI2、SI4、SD2 を切り、SX1 に切られる。**断面形**：浅い U ～ V 字形。**規模**：幅 0.38 ～ 0.81m、検出長 21.29m、確認面からの深さ 0.10 ～ 0.25m を測る。**主軸方位**：N -28°-E。**覆土**：黒褐色土単層。

遺物　縄文土器、弥生土器（壷、甕）、須恵器（坏、甕、壺類）、土師器（坏、甕）、須恵系土師質土器（坏）が出土している。周辺からの流れ込みと考えられ、遺構の時期を示すものではない。

時期　SD2 との重複関係から、中世以降と考えられる。

【SD2】

遺構（第 29 図）

重複関係：SD1、SX1、SK7 に切られ、SI4 を切る。**断面形**：V 字形か。**規模**：検出幅 0.31 ～ 1.09m、検出長 17.89m、確認面からの深さ 0.24 ～ 0.43m を測る。**主軸方位**：N -79°-E。**覆土**：褐灰色土、灰黄褐色土の 2 層に分層される。

遺物　弥生土器（壷、台付甕）、須恵器（坏、甕）、土師器（坏、甕）、須恵系土師質土器（坏）、瓦が出土している。周辺からの流れ込みと考えられ、遺構の時期を示すものではない。

時期　周辺の調査状況から、中世の所産と考えられる。

2）硬化面

【SX1】

遺構（第 30 図）

重複関係：SD1・2、SI4 を切る。**平面形**：帯状を呈する。**規模**：長さ 6.81m、幅 0.39 ～ 0.79 m。**主軸方位**：N-33°-E。**備考**：確認面とほぼ同じかやや高い位置で検出された。

遺物：出土遺物はない。

時期　中世以降と考えられる。

3）土坑

遺構（第 30 図　表 7）

SK1 ～ 7 の 7 基を検出した。属性値を表 7 に示す。全体的に掘り込みが浅く不明瞭であり、耕作痕や植栽痕の可能性がある。

遺物　SK6 を除き、遺物の出土が確認されたが、周辺からの流れ込みと考えられ、遺構の時期を示すものではない。

時期　ほとんどが近世以降の所産と思われる。

4）ピット

遺構（第 31 図　表 8）

P1 ～ 5 の 5 基を検出した。属性値を表 8 に示す。P5 は、柱痕跡やあたりが確認され、柱穴と捉えられる。

遺物　P3・5 で、遺物の出土が確認されたが、周辺からの流れ込みと考えられ、遺構の時期を示すもの

ではない。

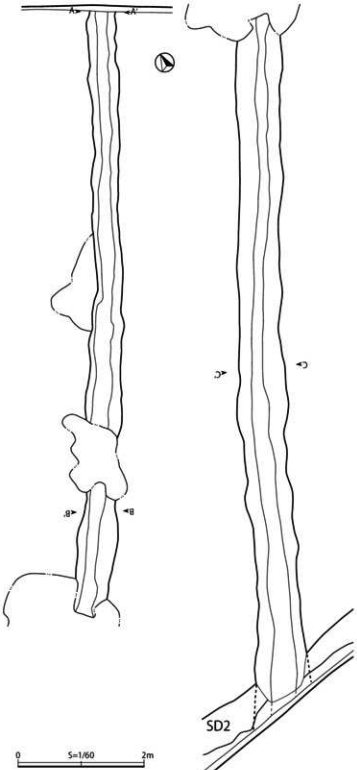
時期　ほとんどが近世以降の所産と思われる。

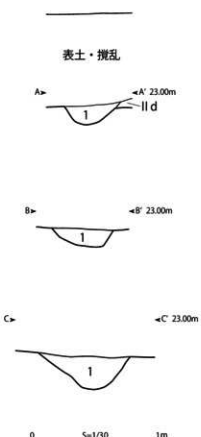
遺構番号	平面形	長軸（長径）	短軸（短径）	確認面からの深さ	主軸方位	覆土	重複関係	遺物	備考
SK1	楕円形	0.87m	0.74m	0.13	N-63°-W	褐灰色土	SI1、P2 を切る。	土師器（坏、甕）	
SK2	楕円形	0.89	0.8	0.20	N-58°-W	褐灰色土、黒褐色土	SI1 を切る。	弥生土器（壷、甕）、須恵器（坏、壷）、土師器（坏、甕）、須恵系土師質土器（坏）	
SK3	楕円形	0.73	0.64m	0.19m	N-89°-E	灰黄褐色土、褐灰色土	SI1 を切る。	土師器（坏、甕）	
SK4	楕円形	0.93m	0.83m	0.13m	N-5°-E	黒褐色土	P4 に切られ、SK5 を切る。	須恵器（坏）、土師器（甕）	
SK5	不整楕円形	1.15m	0.95m	0.47m	N-87°-W	黒褐色土、灰黄褐色土	SK4、P5 に切られる。	須恵器（坏）、土師器（甕）、須恵系土師質土器（坏）	
SK6	楕円形	0.65m	0.59m	0.11m	N-61°-W	灰王褐色土	単独。		
SK7	楕円形	0.60	0.58	0.21	N-2°-W	灰黄褐色土	SD2 を切る。	土師器（甕）、須恵系土師質土器（坏）	

表７　土坑属性表

遺構番号	平面形	長軸（長径）	短軸（短径）	確認面からの深さ	主軸方位	覆土	重複関係	遺物	備考
P1	楕円形	0.54m	0.45m	0.25	N-15°-W	褐灰色土、灰黄褐色土	SI1 を切る		
P2	楕円形	0.33m	0.30m	0.11m	N-37°-W	褐灰色土	SI1 を切り、SK1 に切られる。		
P3	楕円形	0.62	0.46	0.67	N-82°-W	褐灰色土	P4 を切る	須恵器（坏、甕）、土師器（甕）、須恵系土師質土器（坏）	
P4	楕円形	0.66	0.43	0.63	N-70°-W	灰黄褐色土、明黄褐色土	P3 に切られ、SK4 を切る。		
P5	楕円形	0.35	0.28	0.27	N-34°-E	褐灰色土、灰黄褐色土	SK5 を切る。	土師器（甕）	柱痕跡、あたりが確認された。

表８　ピット属性表

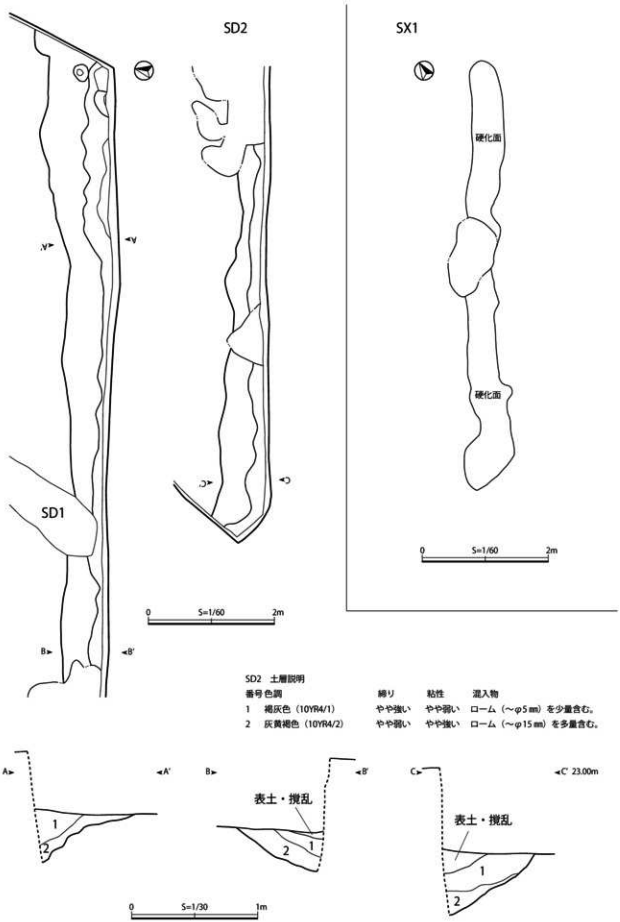




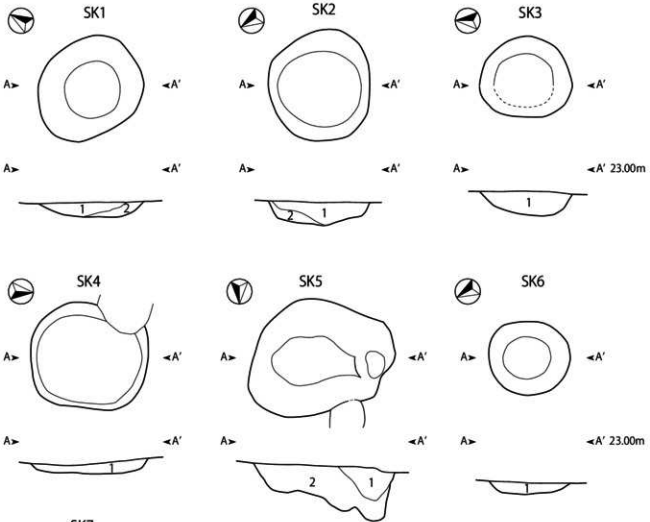
SD1　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	黒褐色（10YR3/1）	やや強い	やや弱い	ローム（～φ20㎜）を中量含む。

第 28 図　SD1 平・断面図



第 29 図　SD2 平・断面図、SX1 平面図



SK1　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を微量含む。
2	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや弱い	ローム（～φ10㎜）を多量含む。

SK2　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ3㎜）を微量含む。
2	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ1㎜）を微量含む。

SK3　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR5/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ1㎜）を微量含む。
2	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや弱い	ロームカキ（～φ3㎜）を少量含む。

SK4　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	黒褐色（10YR3/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ8㎜）を少量、焼土（～φ2㎜）を少量含む。

SK5　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	黒褐色（10YR3/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ30㎜）を少量含む。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ80㎜）を中量含む。

SK6　土層説明

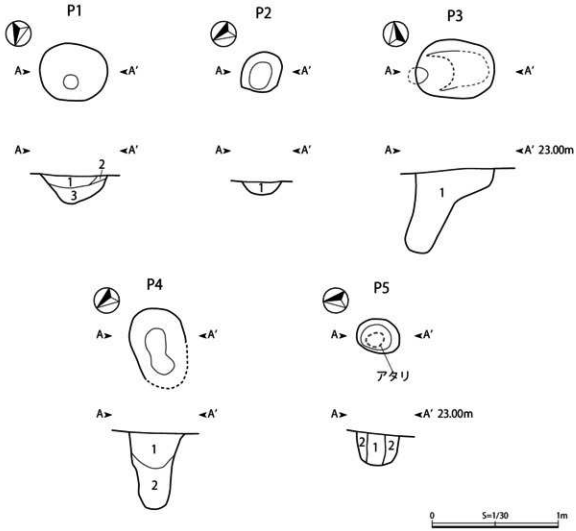
番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を多量含む。

SK7　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ20㎜）を中量含む。

0　S=1/30　1m

第 30 図　SK1 ～ 7 平・断面図



P1　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR5/2）	弱い	やや弱い	ローム（～φ2 mm）を微量含む。
2	褐灰色（10YR4/1）	やや強い	やや強い	ローム（～φ8 mm）を多量含む。
3	褐灰色（10YR4/1）	弱い	やや弱い	ローム（～φ8 mm）を中量含む。

P2　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	やや弱い	やや強い	ローム（～φ2 mm）を少量含む。

P3　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	弱い	やや弱い	ローム（～φ1 mm）を少量含む。

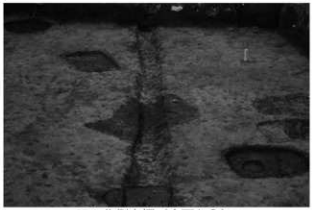
P4　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや弱い	ローム（～φ20 mm）を多量含む。
2	明黄褐色（10YR7/6）	やや強い	やや強い	ロームブロック主体。

P5　土層説明

番号	色調	締り	粘性	混入物
1	褐灰色（10YR4/1）	弱い	やや強い	ローム（～φ3 mm）を中量含む。柱痕跡。
2	灰黄褐色（10YR4/2）	やや強い	やや強い	ローム（～φ10 mm）を多量含む。

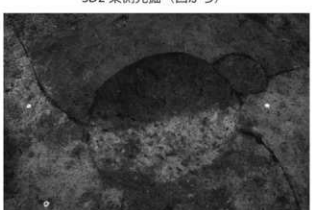
第 31 図　P1 ～ 5 平・断面図

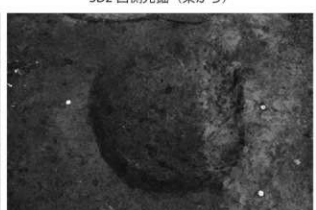

SD1 北側完掘（南西から）

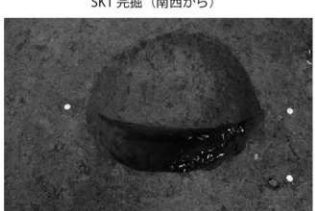
SD1 完掘南側（南西から）

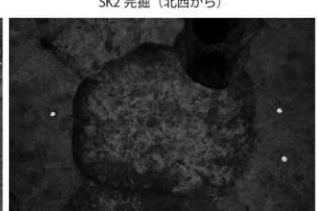
SD2 東側完掘（西から）

SD2 西側完掘（東から）

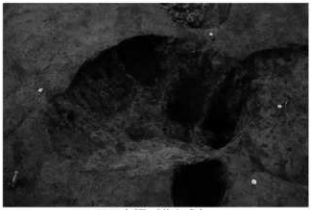

SK1 完掘（南西から）

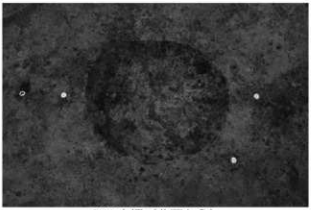

SK2 完掘（北西から）

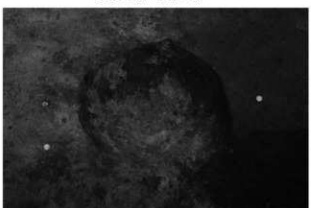

SK3 完掘（西から）

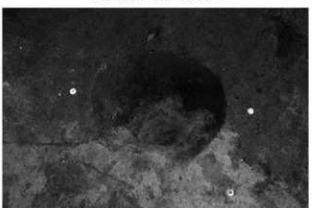

SK4 完掘（東から）

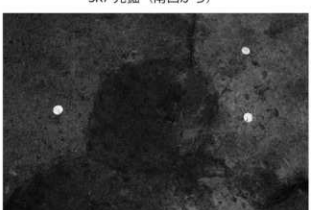
図版 9　SD1・2、SK1 ～ 4


SK5 完掘（北から）

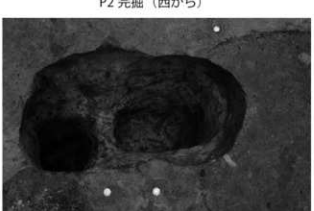

SK6 完掘（北西から）


SK7 完掘（南西から）


P1 完掘（北から）


P2 完掘（西から）

P3 完掘（東から）


P4 完掘（南から）

P5 完掘（西から）

図版 10　SK5 ～ 7、P1 ～ 5

Ⅲ　まとめ

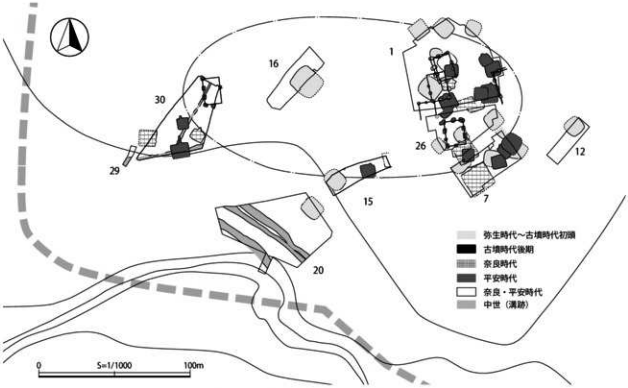
今回の調査で、奈良時代の竪穴住居跡２軒（SI1・3）、平安時代の竪穴住居跡２軒（SI2・4）と掘立柱建物跡１棟（SB1）、中世以降と思われる溝跡２条（SD1・2）、土坑７基（SK1 ～ 7）、ピット５基（P1 ～ 5）を検出した。この内、奈良時代の竪穴住居跡（SI1）では、ハマグリ・マガキを主体とする貝の堆積が認められた。

本調査地点周辺の主な遺構を第 32 図に示し、他の調査地点との関係をみてみたいと思う。

田端不動坂遺跡では、これまでに、弥生時代後期から古墳時代前期前半の竪穴住居跡 105 軒の調査を実施しているが、本調査地点では、該期の遺構は検出されず、遺物の出土も僅少であった。近隣の調査事例をみると、近接する第 15・16・20 地点では、それぞれ１軒の竪穴住居跡が、さらに東側の１・7・26 地点では合わせて 13 軒の竪穴住居跡が検出されている。台地内部の方が遺構密度が高い傾向がみてとれる。本調査地点は台地の縁辺に近いため、該期の遺構や遺物が検出されなかったのであろう。

奈良・平安時代の遺構も、本調査地点に比べ、第１・7・26 地点では濃密である。これも立地の影響が、要因の一つと考えられる。本調査地点では平安時代の掘立柱建物跡１棟（SB1）を検出したが、近隣の調査でも、第１地点で、奈良時代５棟、平安時代１棟、第 26 地点で平安時代１棟、第７地点と第 15 地点では、柱穴がそれぞれ１基検出されている。田端不動坂遺跡の中では、掘立柱建物跡が集中するエリアといえる。また、第１・26 地点の掘立柱建物跡は、平面形態が推定できるもので、２×３間の南北棟であり、規模や軸方位も本調査地点のものに近似している。

SD2 は、第 29 地点で検出された溝跡につながるものと考えられる。第 20 地点では、硬化面を伴う溝跡を検出しており、中世の所産とみられている。第 20 地点の溝跡が崖線沿いに構築されたものだとすると、崖線が本地点と第 20 地点付近で、南西方向へ向きを変え、SD2 はその方向を変えた崖線に沿っている。直接的に SD2 と第 20 地点の溝跡がつながることはないが、同じ性格の遺構である可能性が考えられる。



第 32 図　第 30 地点周辺遺構配置図

＜参考文献＞

北区教育委員会　1985　『田端不動坂遺跡』
1994　『田端町遺跡　田端不動坂遺跡Ⅱ　田端西台通遺跡Ⅱ』
1995　『田端西台通遺跡Ⅲ　田端不動坂遺跡Ⅲ』
2000　『中里峡上遺跡Ⅱ　田端西台通遺跡Ⅳ　田端不動坂遺跡Ⅳ　田端町遺跡Ⅱ』
2003　『田端不動坂遺跡Ⅴ』
2005　『区内遺跡発掘調査報告』
2008　「平成十八年度　区内遺跡本発掘調査・試掘調査概要報告」『文化財研究紀要』
2012　「平成22年度区内遺跡本発掘調査・試掘調査・確認調査概要報告」
『北区埋蔵文化財調査年報－平成22年度』
2013　「平成23年度区内遺跡本発掘調査・試掘調査・確認調査概要報告」
『北区埋蔵文化財調査年報－平成23年度』
2015　「平成25年度区内遺跡本発掘調査・試掘調査・確認調査概要報告」
『北区埋蔵文化財調査年報－平成25年度』
2016　「平成26年度区内遺跡本発掘調査・試掘調査・確認調査概要報告」
『北区埋蔵文化財調査年報－平成26年度』
加藤建設株式会社　2006　『田端不動坂遺跡－田端一丁目19番19号地点－』
2016　『東京都北区　田端不動坂遺跡－田端一丁目22番地点
（仮称）田端聖華保育園新築工事に伴う埋蔵文化財調査－』
共和開発株式会社　2012　「田端不動坂遺跡－田端1-29-9地点－発掘調査報告」
『北区埋蔵文化財調査年報－平成22年度』

附　　編

附編・近代の遺物　―芥川家の田端時代―

木口　直子（田端文士村記念館）

Ⅰ．はじめに

田端 435 番地（現・田端 1-20）が刻んだ長い土地の歴史の中で、大正から昭和にかけての刹那、日本文学を代表する芥川龍之介が家族と共に過ごした時期があった。

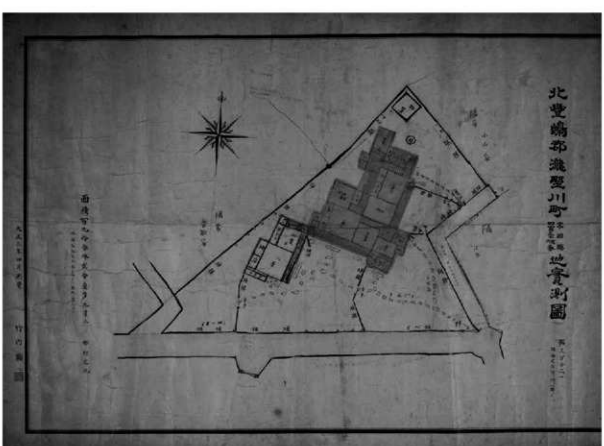
平成 30 年（2018）、東京都北区はその土地の一部を取得し、日本初の芥川龍之介単独顕彰館、（仮称）芥川龍之介記念館開設に向け、準備を進めている。

その整備の一環として、田端不動坂遺跡の埋蔵文化財調査が行われ、発見された２つの防空壕跡より近代の日用品が出土した。但し、これらは必ずしも芥川龍之介ならびにその家族が使用したと言い切れるものではない。戦災により瓦礫の山となった街においては、防空壕であった穴に近隣の廃棄物を埋めたという可能性は捨てきれないからだ。

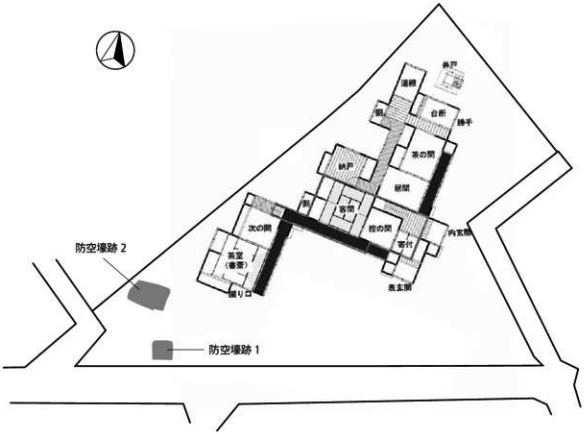
しかし、出土品一つ一つの背景を辿ると、芥川龍之介との不思議な縁を感じるものも多く、これらの遺物が、芥川家と同時代に田端に生きた人々の暮らしや文化の一端を垣間見ることのできる、貴重な資料であることに変わりはない。

Ⅱ．調査成果

1．２つの防空壕跡の発見



□写真：北豊島郡滝野川町字田端 435、436 番地実測図　提供：山梨県立文学館



□写真：防空壕跡が発見された場所

防空壕跡 1 は床（底）の標高が 21.90 m、現況地表面からの深さ 1.25 m。

□写真：防空壕跡 1

防空壕跡 2 は床（底）の標高が 22.00m、現況地表面からの深さ 1.5m。

2．田端に暮らした芥川龍之介とその家族

芥川龍之介は明治25年（1892）、牛乳搾取販売業「耕牧舎」本店の経営者・新原敏三の長男として、東京市京橋区入船町（現・中央区明石町）の外国人居留地の一郭で生まれた。そして生後7か月目、母・フクが精神的な病を患ったことによって、母親の実家である、本所区小泉町（現・墨田区両国）の芥川家へと引き取られ、後に養子となった。

芥川家には、養父となるフクの兄・芥川道章とその妻・儔(とも)に加え、教育熱心な伯母・フキが同居し、龍之介は江戸趣味の色濃く残る家庭で育つ。

明治43年8月、豪雨により荒川の堤防が決壊すると、芥川家は床下浸水に見舞われた。新居を求めた一家は、その2年後に菩提寺である慈眼寺が深川猿江から現在の巣鴨へと移転したことも考慮したためか、候補地に大塚や田端を選んだ。

そして大正3年10月、芥川家は田端435番地に転居する。

当時、帝国大学学生であった龍之介は、友人に宛て、次のような手紙を書いた。

学校へは少し近くなつた　その上前より余程閑静だ　唯高い所なので風あてが少しひどい　其代り夕かたは二階へ上ると靄(もや)の中に駒込台の燈火が一つづゝともるのがみえる
地所が三角なので家をたてた周囲に少し明き地が出来た　これから其処に野菜をつくらうと云ふ計画があるがうまく行くかどうかわからない　庭には椎の木が多い　楓や銀杏も少しはある

—大正3年11月30日　井川恭宛書簡

大学卒業後は鎌倉へと移り、横須賀の海軍機関学校で英語学教授嘱託をしながら創作に励む日々であった。大正7年には、塚本文と結婚し、後に3人の息子（比呂志、多加志、也寸志）をもうける。

大正8年、教職を辞して田端の家に戻ると、大阪毎日新聞社に入社し、専業作家としての生活が始まった。2年後、同社の海外視察員として、約3か月間、中国へと渡るが、この頃より体調を崩すようになる。

心身共に衰弱が進む中、温泉地での療養を繰返しながらも、昭和2年春には、田端の家の庭で子どもと椎の木に登るなど、子煩悩な姿を見せることもあった。

□写真：田端の家の庭にて　右より芥川龍之介、長男比呂志、次男多加志
（「現代日本文学巡礼フィルム」より）　提供：郡山市こおりやま文学の森資料館

しかし、家族の献身的な支えもむなしく、同年7月24日、龍之介は田端の家で自ら命を絶った。享年35歳である。

龍之介没後も、残された家族の田端での生活は続く。

□写真：芥川龍之介の息子たち　昭和４年４月

「田端の家」には龍之介亡き後約十七年間遺族たちは住んでいた。太平洋戦争が烈しさを増してきて、昭和十九年六月、一族は藤沢市鵠沼西海岸の文の実家塚本方に疎開した。疎開の際田端の家は鉄道官舎として貸している。

（略）

そして、奇しくも次男多加志が、ビルマで戦死した同日、「田端の家」はアメリカ空軍Ｂ 29 の編隊による東京大空襲によって跡かたもなく焼失した。

―芥川瑠璃子『双影　芥川龍之介と夫比呂志』

今回発見された防空壕跡は、昭和 20 年４月 13 日、この土地が空襲で焦土と化した後、その役目を終えて埋められたと推定される。

□写真：戦災後の芥川家跡地 (左は昭和 28 年、右は昭和 29 年　野田宇太郎撮影)
提供：野田宇太郎文学資料館

3．出土品が伝える当時の生活ぶり

【防空壕跡１の出土品】

□写真：防空壕跡１　出土品

①「耕牧舎」の牛乳瓶：出土品１

「耕牧舎」は明治12年（1879）、実業家・渋沢栄一によって益田孝らとともに設立された。その前年、当初緬羊事業を計画していた渋沢らは、内務省勧農局所管の下総牧羊場（現・千葉県富里市）を訪問し、「雇（やとい）」と呼ばれた官員の一人として働く新原敏三（後に龍之介の父となる）と出会う。同13年、神奈川県仙石原の牧畜開発が始まると、敏三も従事したが、仙石原は緬羊に適さない土地であったため、牧羊・搾乳業へと事業変更し、箱根と東京での牛乳販売が開始された。明治16年、東京の拠点となったのが、外国人居留地に隣接する、築地入船町８丁目１番地（現・中央区明石町）の本店である。敏三は「耕牧舎」の一員として、この本店と前年に開業した北豊島郡金杉村56番地（現・台東区根岸）の支店の実質的な経営者となった。順調に業績が伸びると、「耕牧舎」は豊多摩郡内藤新宿２丁目71番地（現・新宿区新宿）、北豊島郡滝野川村大字西ヶ原字御殿下1310番地（現・北区栄町）にも支店を増やしていった。

□写真：「耕牧舎」の牛乳配達表・請取證（石井宏尚家文書）

提供：北区立中央図書館

その後、明治26年、入船町の本店が外国人居留地の用地拡大に伴って立ち退きを余儀なくされたため、敏三は住居とともに本店を芝区新銭座（しんせんざ）町16番地（現・港区浜松町）へと移転した。そして同37年、仙石原店管理者の死去を契機に、渋沢らは箱根の「耕牧舎」を廃業し、東京の「耕牧舎」を各店の管理者へと売却する。敏三は渋沢の興した「耕牧舎」から独立し、本店と新宿の支店を所有することとなった。

僕の父は牛乳屋であり、小さい成功者の一人らしかつた。僕に当時新らしかつた果物や飲料を教へたのは悉く僕の父である。バナナ、アイスクリイム、パイナアツプル、ラム酒、――まだその外にもあつたかも知れない。僕は当時新宿にあつた牧場の外の槲の葉かげにラム酒を飲んだことを覚えてゐる。

―芥川龍之介「点鬼簿」

今回出土した牛乳瓶には、胴部に「全乳　耕牧舎本店　電下谷二〇七一　一合入」と陽刻がある。「下谷二〇七一」の電話番号は、もともと根岸にあった支店が、明治35年、北豊島郡日暮里町大字谷中本1062番地（現・荒川区東日暮里）に移転した際のものである。さらに、大正12年9月1日の関東大震災により、下谷局をはじめとする東京市内の電話局の大半が被災したのをきっかけとして、従来の手働式の交換機から自動交換機への改式工事が進み、電話番号も変更されたため、当該資料が製造されたのは龍之介存命中の大正12年以前である可能性が高い。

□写真：日暮里支店之圖（耕牧舎蔵版『牛乳の用法』口絵写真より）　提供：山梨県立文学館

②「丸善」のインキ瓶：出土品4、63、64

「丸善」は、明治2年（1869）の横浜で、福沢諭吉門下であった早矢仕有的（はやしゆうてき）により、「丸屋商社」として創業した。

創業間もない明治初期は、民間の教育普及が進み、学制が公布されるなど教育制度が確立した時代でもあった。学生の増加に伴い、文具である「インキ（ク）」の需要も高まったが、当時、海外からの輸入インキは高価であり、また国内の家内工業で作られたインキには粗悪品も多かった。そこで明治18年、日本橋店の敷地内に「丸善工作部」が組織され、インキ製造が開始される。このインキは当時の博覧会等での受賞を受け、後の「丸善インキ」「丸善アテナインキ」の開発に繋がった。明治36年からは本郷区駒

込千駄木町 82 番地（現・文京区千駄木）にあった工場にてインキ製造が始まり、大正 12 年には北豊島郡日暮里町大字金杉 777 番地（現・荒川区東日暮里）に日暮里分工場が新設されている。

芥川龍之介が執筆に「丸善」のインキを使用していたことは有名である。

ペンは金色のGペンで、私はこれを金Gと言っておりました。
それに丸善の、ブルーブラックのインクをつけて原稿を書きました。

―芥川文述　中野妙子記『追想 芥川龍之介』

□写真：「丸善」インキポスター　満谷国四郎作（大正 6，7 年）／インキ瓶（大正から昭和期）
提供：丸善雄松堂株式会社

また、インキのみならず、龍之介は学生時代より本を求めて度々「丸善」に足を運び、日本橋店の二階の洋書売場については作品の中にも登場している。

僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「伝説」を見つけ、二三頁づつ目を通した。

―芥川龍之介「歯車」

□写真：大正期の「丸善」日本橋店外観と二階洋書売場　提供：丸善雄松堂株式会社

今回発見されたインキ瓶の内、常滑焼の瓶は、ガラス瓶での販売が始まる以前、主に大正時代に多く出回っていた。一般に流通していた商品であるため、龍之介の所蔵物であると言い切るのは難しいが、当時使用していたものと同様のインキ瓶である可能性は高い。

ちなみに、芥川家が被災した昭和20年4月13日の空襲では、日暮里にあったインキ工場も全焼した。

③「樂天堂醫院」の薬瓶：出土品8

「樂天堂醫院」は、明治40年（1907）、田端348番地（現・田端1-15）に元軍医・下島勲によって開業された。患家には、芥川龍之介のほか室生犀星、久保田万太郎、萩原朔太郎、瀧井孝作、堀辰雄、岩田専太郎など、錚々たる田端人たちが名を連ねている。

□写真：「樂天堂醫院」門前

下島先生はお医者なり。僕の一家は常に先生の御厄介になる。又空谷山人（くうこくさんじん）と号し、乞食俳人井月（せいげつ）の句を集めたる井月句集の編者なり。僕とは親子ほど違ふ年なれども、老来トルストイでも何でも読み、論戦に勇なるは敬服すべし。僕の書画を愛する心は先生に負ふ所少なからず。

―芥川龍之介「田端人」

龍之介の書斎に掲げられた扁額「澄江堂」の揮毫のほか、雑誌『驢馬』の題字を手がけるなど、書家としての一面もあった下島は、『井月句集』の編纂、句集『薇（ぜんまい）』、随筆集『人犬墨』を出版するなど、俳人・随筆家としても才能を発揮した。

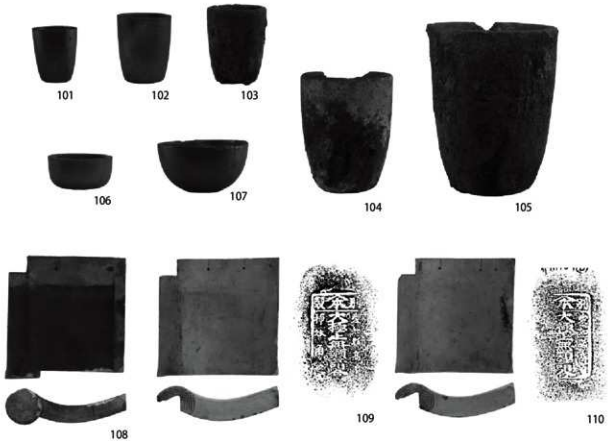
昭和2年7月24日、龍之介の主治医として最期を看取ったのも下島である。

焦燥と腹だたしさの混迷境を辿つて、漸く轉（ころ）がるやうに寝室の次の間へ一歩這入るや、チラと蓬頭蒼白の唯ならぬ貌が逆に映じた。―右手へ廻つて坐るもまたず聽診器を耳にはさんで寝衣の襟を掻きあけ（ママ）た。（略）體温はあるが、最早全く絶望であることを知つた。

―下島勲「芥川龍之介終焉の前後」

「樂天堂醫院」は昭和11年に閉業し、その時、下島も田端から転居した。従って、出土した薬瓶が使用されたのは、昭和11年以前のことであったと推定される。

【防空壕跡 2 の出土品】



□写真：防空壕跡 2　出土品

①坩堝 (るつぼ)：出土品 101 ～ 107

今回の出土品の中でも坩堝は、金属を溶かす時に使用する耐熱容器という特殊な品であり、一般の家庭で所蔵される機会はほとんどない。そのため、戦災時に西側の隣家であった鋳金家・香取秀真とその息子である正彦の工房にて使用されていたものである可能性が高い。ちなみに、大正８年から昭和9年までは、同じく鋳金家・内藤春治も内弟子として同居している。

②瓦：出土品 108 ～ 110

愛知県は、古くから、やきものに適した「三河土」と呼ばれる良質の粘土が採れることで知られ、幕末から明治時代にかけて、瓦の産地として大きく発展した。とくに鉄道が整備される以前において、重量物の運搬は船によるのが一般的であり、海に近く、港に恵まれた高浜周辺は、瓦を関東地方へと出荷するには最適な場所であった。そのため、明治以降、東京の住宅には、「三州瓦」が多く使用され、日本三大瓦の一つとなっている。

出土した瓦には、当時の日本家屋に使用されることの多かった「いぶし瓦」と、比較的西洋風のモダンなデザインに使用されることの多かった素焼き状の瓦の２種がある。このうち、素焼き状の２枚には「愛知縣高濱」の刻印を確認することができた。素焼き状の瓦が「三州瓦」であるならば、昭和３年に完成した「塩焼瓦」以前に製造された可能性が高い。故に、これらの瓦は昭和初期以前に建築された住居等に使用されたものと推定される。

※隣家・香取秀真について

庭木に烏瓜(からすうり)の下つたのは鋳物師香取秀真の家。

―芥川龍之介「東京田端」

芥川龍之介にとって18歳年上の「お隣の先生」、鋳金家・香取秀真については、「時には叔父を一人持ちたる気になり、甘つたれることもなきにあらず」と語るなど、家族ぐるみで付き合いがあった。

芥川家が垣一重へだてた西北の畠地に住宅を新築したのは大正三年、私が四十一歳。私が今の住宅を芥川家の西北に新築したのが大正六年で四十四歳。大正八九年頃から芥川龍之介君と往復するやうになつた。

―香取秀真『歌集　天之眞榊』

千葉県出身の秀真は、明治42年、田端433番地（現・田端1-20、芥川家の東隣）に転入し、大正6年、438番地（現・田端1-20、芥川家の西隣）に転居した。東京美術学校教授、帝室技芸員、帝国美術院会員などを務めた鋳金界の第一人者で、明治40年には「東京鋳金会」を設立する。昭和28年、同じく田端の住人で陶芸家・板谷波山と共に工芸界では初となる文化勲章を受章した。さらに正岡子規門下の歌人としても名を馳せ、文士としての一面も持っている。長男である正彦も同じ鋳金家として活躍し、後に重要無形文化財の保持者（人間国宝）として認定された。

大正六年五月、四三三番地から四三八番に家を新築して移った。五十坪の住居に十坪の工場を建てた。芥川竜之介一家が田端四三五番地に来られたのはそれより先の大正三年十月末のこと。田端そのものに住んだのはこちらが明治の末で少し早い。いずれにしろこの転居で、芥川家の東隣から西隣になった。

家は、二百坪ほどの土地に母屋が十畳二間、六畳二間、四畳半二間、台所十畳に洋間と書庫。さらに六畳と十二畳、約四畳の二階があった。関東大震災後、芥川さんは書斎を新築されたが、日の当たる部屋を嫌って西に窓を切り、日の当たるのを好む父の部屋と垣根をへだててちょうど向かいあう格好になった。ある時芥川さんは父に「ときに書斎に窓を明けたのは、先生に話したいためであるから、私が窓をあけて、先生、といったら、ハイ、と返事して下さい」といわれたそうだ。「じゃあ、そうしましょう」と父は答えたが、ついに亡くなるまで「先生」と声はかからなかったという。

―香取正彦『鋳師の春秋』

昭和20年4月13日の空襲で、芥川家と同様、香取家も焼失した。

Ⅲ．まとめ

今回の（仮称）芥川龍之介記念館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査では、本来、近代の埋蔵物は調査の対象外であった。しかし、発見された防空壕跡からの出土品は、芥川龍之介ほか、芥川一家が田端に暮らした時代の痕跡であり、土地の記憶が刻まれた貴重な資料となり得る。そのため、（公財）北区文化振興財団　田端文士村記念館の責任において、調査の上、報告書としてまとめた。

今後、記念館の設置にあたっては、出土品の調査を継続し、さらなる歴史の掘り起こしが望まれる。

参考文献

『芥川龍之介全集』全二十四巻（岩波書店）
芥川文述　中野妙子記『追想 芥川龍之介』（筑摩書房）
芥川瑠璃子『双影　芥川龍之介と夫 比呂志』（新潮社）
香取秀真『歌集 天之眞榊』（學藝書院）
香取正彦『鋳師の春秋』（日本経済新聞社）
下島勲『芥川龍之介の回想』（靖文社）

『牛乳の用法』（耕牧舎）明治 37 年 11 月 3 日発行／明治 42 年 9 月 8 日発行

武田尚子『ミルクと日本人』（中央公論新社）
山下一郎『鶯の谷　根岸の里の覚え書き』（冨山房インターナショナル）
復刻版「東京府下三河島町日暮里町全図　大正 14 年（1925）」（荒川区教育委員会　荒川ふるさと文化館）
『逓信事業史』第四巻（逓信協會）
『関東電信電話百年史』（電気通信協会）

『丸善百年史　日本近代化のあゆみと共に』（丸善株式会社）
柿田富造「－近代博覧会に見る－ 常滑焼小細工品の流れ」『常滑市民俗資料館　研究紀要Ⅶ』（常滑市教育委員会）

『高浜市誌』第二巻（高浜市）
『三州瓦と高浜いま・むかし（新装版）』（高浜市やきものの里かわら美術館）

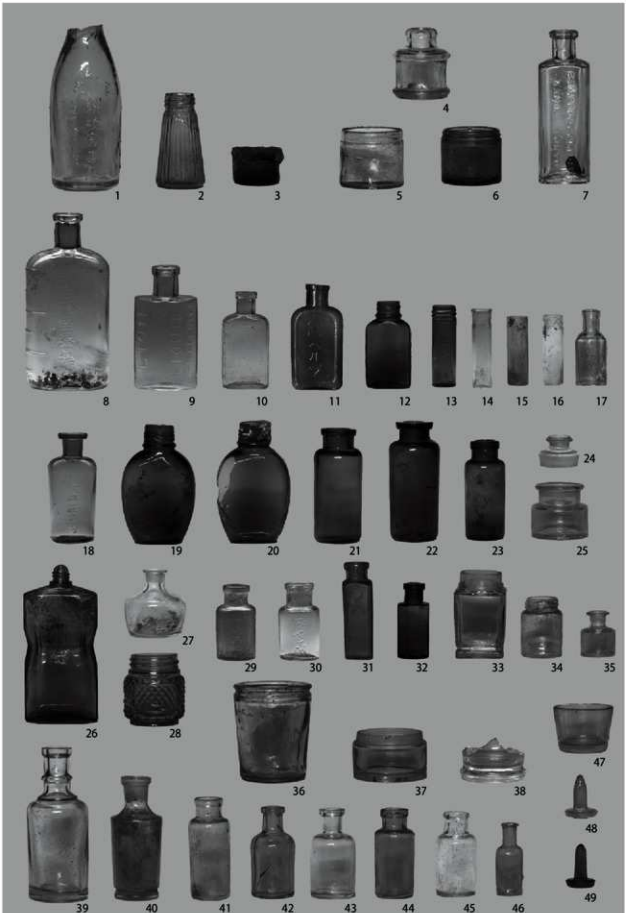
桜井準也『増補 ガラス瓶の考古学』（六一書房）
平成ボトル倶楽部監修『日本のレトロびん』（グラフィック社）
町田忍『懐かしの家庭薬大全』（角川書店）

協力

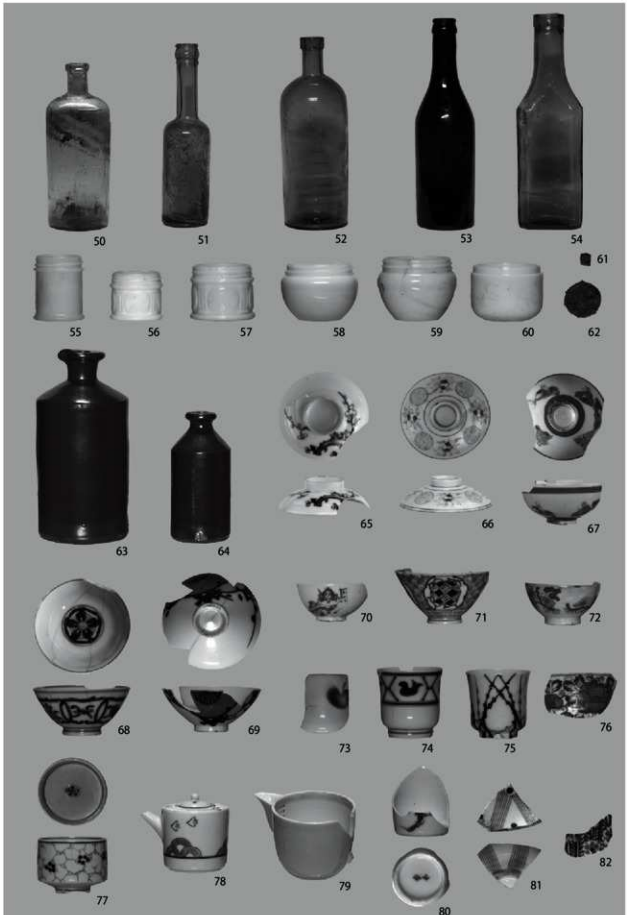
愛知県常滑市とこなめ陶の森資料館 小栗康寛氏
株式会社丸善ジュンク堂書店 宮原義郎氏
高浜市やきものの里かわら美術館 井上あゆこ氏

荒川ふるさと文化館
北区立中央図書館
郡山市こおりやま文学の森資料館
野田宇太郎文学資料館
丸善雄松堂株式会社
山梨県立文学館

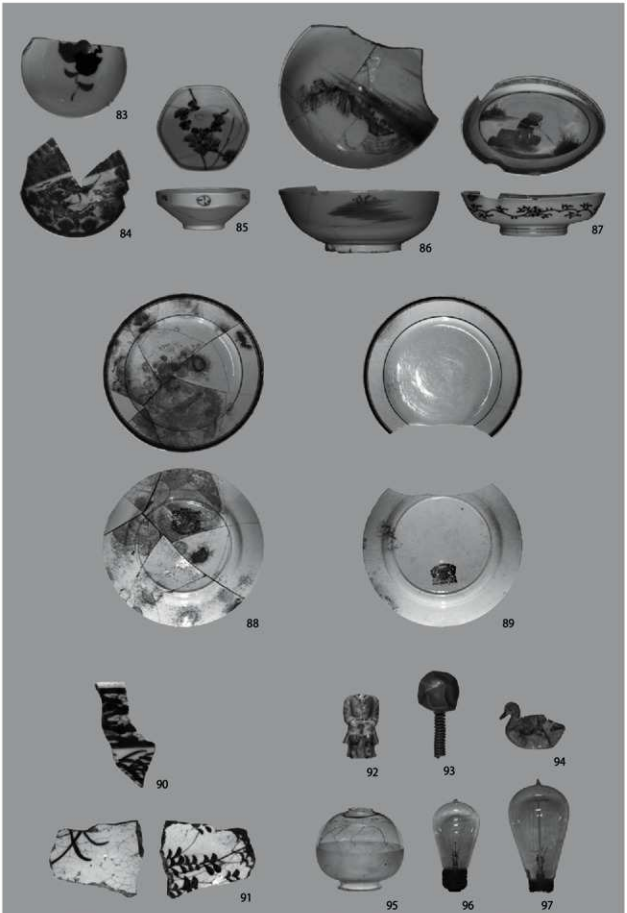
※引用文に関しては一部常用漢字に改めた。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

防空壕跡出土品（1）

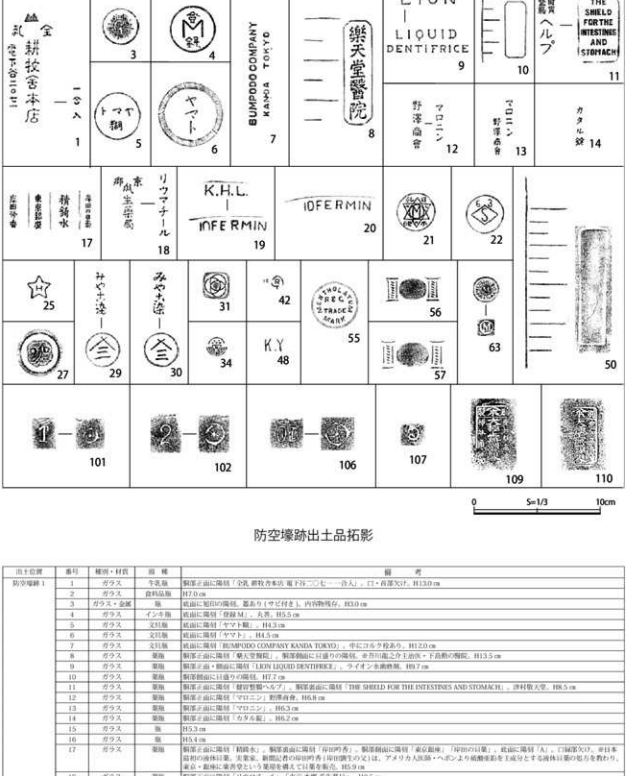

50
51
52
53
54
61
55
56
57
58
59
60
62
63
64
65
66
67
70
71
72
68
69
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82

防空壕跡出土品（2）



防空壕跡出土品（3）

防空壕跡出土品（4）



防空壕跡出土品拓影

出土位置	番号	種別・材質	器種	備考
防空壕跡１	1	ガラス	生薬瓶	側部正面に陽刻「全氏 耕牧舎本店 電下谷二〇七一一一合入」。口・首部欠け。H13.0 cm
	2	ガラス	食料品瓶	H7.0 cm
	3	ガラス・金属	瓶	底面に原印の陽刻。蓋あり（サビ付き）。内容物残存。H3.0 cm
	4	ガラス	インキ瓶	底面に陽刻「登録 M」。丸型。H5.5 cm
	5	ガラス	文具瓶	底面に陽刻「ヤマト瓶」。H4.3 cm
	6	ガラス	文具瓶	底面に陽刻「ヤマト」。H4.5 cm
	7	ガラス	文具瓶	底面に陽刻「BUMPODO COMPANY KANDA TOKYO」。中にコルク栓あり。H12.0 cm
	8	ガラス	薬瓶	側部正面に陽刻「樂天堂醫院」。側部側面に口盛りの陽刻。※井川直之介主治医・下島勲の開院。H13.5 cm
	9	ガラス	薬瓶	側部正面・側面に陽刻「LION LIQUID DENTIFRICE」。ライオンを擬物語。H9.7 cm
	10	ガラス	薬瓶	側部側面に口盛りの陽刻。H7.7 cm
	11	ガラス	薬瓶	側部正面に陽刻「健胃整腸ヘルプ」。側部裏面に陽刻「THE SHIELD FOR THE INTESTINES AND STOMACH」。洋材敷文堂。H8.5 cm
	12	ガラス	薬瓶	側部正面に陽刻「マロニン」。野澤商會。H6.8 cm
	13	ガラス	薬瓶	側部正面に陽刻「マロニン」。H6.3 cm
	14	ガラス	薬瓶	側部正面に陽刻「カタル錠」。H6.2 cm
	15	ガラス	瓶	H5.3 cm
	16	ガラス	瓶	H5.4 cm
	17	ガラス	薬瓶	側部正面に陽刻「精錬水」。側部裏面に陽刻「原田吗香」。側部側面に陽刻「東京麻痺」。底面に陽刻「A」。口縁部欠け。※日本最初の液体目薬。発案家、麻酔記者の原田吗香（原田潤生の父）は、アメリカ人医師・ヘボンより硫酸亜鉛を主成分とする液体目薬の処方を教わり、東京・麻痺に薬舗堂という薬屋を構えて試験を繰り。H5.9 cm
	18	ガラス	薬瓶	側部正面に陽刻「リウマチール」。「東京 本郷 広生堂」。H8.5 cm
	19	ガラス	薬瓶	側部側面に陽刻「BIOFERMIN」「K.H.L.」。乳酸菌整腸薬「ビオフェルミン」。株式会社神戸衛生実験所。※発売は株式会社武田薬品工業に委託。口縁部欠け。H9.5 cm
	20	ガラス	薬瓶	19と同じ。別の。蓋半分あり。
	21	ガラス	薬瓶	底面に陽刻「日本乳酸 M NNK」。H9.0 cm
	22	ガラス	薬瓶	底面に陽刻（「63」とこの中に「S」）。H9.3 cm
	23	ガラス	瓶	完形。H7.7 cm
	24	ガラス	栓	25の陽刻。H2.3 cm
	25	ガラス	薬瓶	底面に陽刻（この中に「H」）。星製薬株式会社。※明治39年、星一（星新一の父）が製薬所を創業。44年星製薬株式会社を設立。H4.2 cm
	26	ガラス	化粧品瓶	H12.0 cm
	27	ガラス	化粧品瓶	底面に花巻（商標）の陽刻。資生堂。H5.3 cm
	28	ガラス	瓶	H5.6 cm

防空壕跡出土品一覧（１）

出土位置	番号	種別・材質	器種	備考
防空壕跡 1	29	ガラス	繊維染料瓶	底面に陽刻（笠らしき模様の下に「三」）。製瓶ガ面に陽刻「みやさ染」。株式会社星商店。H6.0 cm
	30	ガラス	繊維染料瓶	29 に同じ。陽刻の字体が異なる。
	31	ガラス	瓶	底面に陽刻（三つ巴）が重なったマーク）。ミツワ石鹸。H7.7 cm
	32	ガラス	瓶	八角形。H6.0 cm
	33	ガラス	瓶	口縁部欠け。七ビあり。H6.7 cm
	34	ガラス	瓶	底面に陽刻（雨模様らしきマーク）。H4.5 cm
	35	ガラス	瓶	H3.5 cm
	36	ガラス	瓶	H7.6 cm
	37	ガラス	瓶	底面に剥れ。H3.7 cm
	38	ガラス	瓶	底部。H3.5 cm
	39	ガラス	瓶	H11.7 cm
	40	ガラス	瓶	内部が赤紫色に変色。H9.5 cm
	41	ガラス	瓶	気泡。H8.0 cm
	42	ガラス	瓶	底面に陽刻「K」。H7.0 cm
	43	ガラス	瓶	H6.8 cm
	44	ガラス	瓶	H7.0 cm
	45	ガラス	瓶	気泡。H6.3 cm
	46	ガラス	瓶	側部側面に突起。H5.5 cm
	47	ガラス	瓶	H3.3 cm
	48	ガラス	栓	上面に陽刻「KY」。H3.3 cm
	49	ガラス	栓	H3.3 cm
	50	ガラス	薬瓶	側部側面に口盛りの陽刻。H17.5 cm
	51	ガラス	瓶	H9.5 cm
	52	ガラス	瓶	底面に陽刻（☆）。H20.5 cm
	53	ガラス	瓶	H23.0 cm
	54	ガラス	瓶	H23.0 cm
	55	ガラス	薬瓶	底面に陽刻「MENTHOLATUM BIG TRADE MARK」（近江セールス株式会社「メンソレータム」（大正 9 年輸入販売開始）。H5.2 cm
	56	ガラス	化粧瓶	側部側面に丸い窓のようなデザイン。平尾賛平商店「ムートクレーム」（明治 42 年販売開始）。卓明初期に丸い窓 1 つから 2 つにデザイン変更。H3.0 cm
	57	ガラス	化粧瓶	56 に同じ。大きさが異なる。H4.3cm
	58	ガラス	化粧瓶	剥れ。H4.5 cm
	59	ガラス	化粧瓶	デザインは 58 に同じ。高さ（トップ部分のスクリューの数）が異なる。七ビあり。H5.0 cm
	60	ガラス	化粧瓶	H4.5 cm
	61	コルク	栓	H0.8 cm
	62	金属	蓋	全体にサビあり。直径 3.0 cm
	63	陶器	インキ瓶	側部側面に陽刻（○の中に「MARUZENSOKYOKO」「M」）。底面に陽刻（○の中に「M」）。丸善。明治末期から昭和初期の産廃物。H20.5 cm W9.5 cm
	64	陶器	インキ瓶	陽刻も、丸善。明治末期から昭和初期の産廃物。H13.5 cm W6.0 cm
	65	磁器	梅壺	梅の絵柄。欠け。H3.0 cm
	66	磁器	梅壺	梅の絵柄と「長寿」の文字。H2.5 cm
	67	磁器	飯碗	欠け。H6.5 cm
	68	磁器	飯碗	底面に墨印（二重 ○の中に「福」）。H5.0 cm
	69	磁器	飯碗	欠け。H4.2 cm
	70	磁器	飯碗	鶴丸模・犬・雉の絵柄。剥れ。H4.0 cm
	71	磁器	飯碗	支那風の絵柄。剥れ。H5.7 cm
	72	陶器	飯碗	松の絵柄。剥れ。H4.0 cm
	73	陶器	湯呑	林檎の絵柄。剥れ。H6.5 cm
	74	磁器	湯呑	底面に墨印（渡字らしき４文字）。欠け。H7.2 cm
	75	磁器	湯呑	蝶のある枝模様。七ビあり。H7.0 cm
	76	磁器	湯呑	絵片。
	77	磁器	小鉢	梅の模様。高台に欠け。H5.8 cm
	78	磁器	猪口	千鳥、波の絵柄。欠け、七ビあり。H6.7 cm
	79	陶器	水差し	剥れ。底一本の名残あり。H6.7 cm
	80	磁器	徳利	底面に墨印「作集」。絵片。
	81	陶器	食器	絵片。
	82	磁器	食器	絵片。
	83	磁器	皿	剥れ。H2.5 cm
	84	磁器	平皿	鶴模様。H2.0 cm
	85	磁器	皿	梅の絵柄。剥れ。H4.0 cm
	86	磁器	皿	鶴模様。剥れ。H6.0 cm
	87	磁器	皿	鶴模様。側面に梅の模様。底面に文字。H4.3 cm
	88	磁器	洋皿	底面に墨印「IMPERIAL RONSIONE CHINA NIPPON KOSHITSU TOKI」。日本硬質陶器。剥れ。H2.0 cm W20.0 cm
	89	磁器	洋皿	88 に同じ。欠け。
	90	磁器	不明	絵片。厚さ 2.0 cm
	91	陶器	不明	植物模様。絵片。厚さ 1.0 cm
	92	陶器	人形	H7.0 cm
	93	不明	玩具	掘ると音が鳴る。
	94	不明	玩具	魚の形状。H4.0 cm W5.5 cm
	95	ガラス	不明	鶴らしき形状。H6.0 cm
	96	ガラス	電球	大正～昭和時代初期（推定）。半電球の先に突起（チップ）の名残り。突起がなくなったのは昭和 9 年頃。H9.5 cm
	97	ガラス	電球	96 に同じ。突起あり。H12.0 cm
防空壕跡 2	98	陶器	徳利	側部正面に「小石川 酒料 金」。幸高田徳利（多治見市）か。江戸後期から明治・大正時代にかけ、酒販店から酒豪者への謝礼保証、酒蔵・酒屋の名告記字。H22.0 cm
	99	陶器	徳利	98 に同じ。側部正面に「昌門屋 千鳥本 電ホ三九八」。H21.5cm
	100	陶器	徳利	98 に同じ。絵片。
	101	黒釉	印鑑	側部に印刻（「1」と○の中に「・」）。H8.5 cm W7.0 cm
	102	黒釉	印鑑	側部に印刻（「2」と○の中に「・」）。H10.5 cm W9.0 cm
	103	黒釉	印鑑	H9.5 cm W12.0 cm
	104	黒釉	印鑑	口縁部欠け。H18.5 cm W15.0 cm
	105	黒釉	印鑑	口縁部欠け。H27.0 cm W20.0 cm
	106	黒釉	印鑑	側部に印刻（「5」らしき数字（上部欠け）。H14.5 cm W8.0 cm
	107	黒釉	印鑑	側部に印刻（「5」らしき数字（上部欠け）。H14.5 cm W8.0 cm
	108	瓦	万十軒瓦	三州瓦か。H28.0 cm W28.0 cm
	109	瓦	万十軒瓦	底面に刻印「刻製 愛知瓦株式会 知合 角」。三州瓦。H28.5 W28.5 cm
	110	瓦	万十軒瓦	底面に刻印「刻製 愛知瓦株式会」。三州瓦。H28.5 cm W28.5 cm
	111	瓦	鬼瓦	H20.0 cm W35.0 cm
	112	瓦	鬼瓦	H21.0 cm W35.0 cm
	113	瓦	万十軒瓦	小巴。直径 9.0 cm

防空壕跡出土品一覧（2）

報告書抄録

ふりがな	とうきょうときたく　たばたふどうさかいせき
書　　名	東京都北区　田端不動坂遺跡
副 書 名	ー田端 1-20-9 地点　（仮称）芥川龍之介記念館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告ー
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	遠竹陽一郎
編集機関	株式会社　東京航業研究所
所 在 地	埼玉県川越市大字伊佐沼 28 番 1
発行年月日	令和 3（2021）年 3 月 26 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査	調査原因
所収遺跡	所 在 地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″	（発掘調査）	面積	
たばたふどうさかいせき 田端不動坂遺跡	とうきょうときたく 東京都北区 たばた 田端 1-20-9	13117	32	35° 44′ 12″	139° 45′ 36″	令和元（2019）年 12 月 3 日 ～ 令和 2（2020）年 2 月 6 日	230.2 ㎡	（仮称） 芥川記念 館建設

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田端不動坂遺跡	集落	奈良・ 平安時代	竪穴住居跡 4 軒 掘立柱建物跡 1 棟	土師器、須恵器、須恵系土師質土器、鉄製品	奈良時代の竪穴住居跡（SI1）でハマグリ・マガキを主体とする貝層を検出した。
		中世以降	溝状遺構　2 条 硬化面　1 箇所 土坑　7 基 ピット　5 基		

要　　約	本調査地点は、田端不動坂遺跡の北西部に位置する。奈良時代の竪穴住居跡 2 軒（SI1・3）、平安時代の竪穴住居跡 2 軒（SI2・4）と掘立柱建物跡 1 棟（SB1）、中世以降と思われる溝跡 2 条（SD1・2）、硬化面 1 箇所、土坑 7 基（SK1 ～ 7）、ピット 5 基（P1 ～ 5）を検出した。この内、奈良時代の竪穴住居跡（SI1）では、ハマグリ・マガキを主体とする貝の堆積が認められた。
資料の保管機関	東京都北区教育委員会事務局　教育振興部　飛鳥山博物館 〒 114-0002　東京都北区王子 1-1-3 TEL03（3916）1133　FAX03（3916）5900

東京都北区
田端不動坂遺跡
－田端 1-20-9 地点　（仮称）芥川龍之介記念館建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査－
発行日　令和 3（2021）年 3 月 26 日

編　集　株式会社　東京航業研究所
埼玉県川越市大字伊佐沼 28 番 1

発　行　東京都北区
株式会社　東京航業研究所
埼玉県川越市大字伊佐沼 28 番 1

印　刷　関東図書株式会社
埼玉県さいたま市南区別所 3-1-10